

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2009.2

No.92

会報

目次

■ 第16期理事長挨拶	1
■ 第16期 役員・幹事・各委員会名簿	2
■ 日本分子生物学会第9回春季シンポジウム	3
「分子生物学の新たな胎動～宮崎から黎明の曙光～」のご案内	
■ 第32回（2009年）日本分子生物学会年会開催のお知らせ（その1）	4
■ 第31回日本分子生物学会年会 年会報告	11
■ 学会誌「Genes to Cells」に関する報告	11
■ 研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告	12
■ 男女共同参画委員会活動報告	18
■ 第15期・第16期合同理事会記録	19
■ 第16期第2回理事会記録	26
■ 平成21年度（第31回）通常総会記録	31
■ 平成20年度（2008年度）収支決算報告	33
■ 監査報告書	37
■ 平成21年度（2009年度）収支予算	38
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	39
■ 研究助成一覧	39
■ 2009年度第4回「ロレアル－ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」	42
募集のお知らせ	
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ	42
○千里ライフサイエンスセミナー	
「エピジェネティクス：ゲノムを管理し活用する戦略」	
○第12回マリンバイオテクノロジー学会大会	
○日本ヒトプロテオーム機構 第7回大会（7th JHUPO）	
■ 賛助会員芳名	44



特定非営利活動法人

日本分子生物学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/mbsj/>

新会員管理システムへの移行に伴ない、2007 年に、新しい会員番号（数字 6 桁）とパスワードが付与されております。パスワードを紛失、もしくは忘れられておられる場合には、学会ホームページにアクセスいただき、パスワード再発行のお手続きをお取りくださるようお願い申し上げます。

【ログイン ID とパスワードの発行について】

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/secretariat/member/>

〈パスワードの再発行〉

■日本分子生物学会第 9 回春季シンポジウムの公式サイトが開設されています。

URL: <http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/2bio/mbsj2009/>

■第 32 回（2009 年）日本分子生物学会年会ホームページが公開されました。

URL: <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2009/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-5

20 山京ビル 11 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

第 16 期理事長挨拶

会員の皆様へ

昨年 9 月の理事会において日本分子生物学会の第 16 期理事長に選任され、今後二年間、本学会の運営を担当することになりました。

分子生物学に関する研究・教育を推進するための学術研究及び普及啓発活動を行い、我が国におけるライフサイエンスの進歩に寄与することを目的として昭和 53 年に設立された本学会は、平成 20 年に創立 30 周年を迎え、現在の会員数は一万五千名を超えました。倍以上の歴史を誇る学会も多数ありますが、本学会は急速に大きく発展した希有な例といえるでしょう。分子生物学が、生命科学の多くの分野における基盤科学として、これらの分野を統合し発展させる役割を担ってきたことは広く認知されています。本学会の会員諸氏が、近年の生命科学研究の急速な展開に深く関わり、常に中心的な役割を果たして来られたことは、本学会の誇りであります。

第 16 期においては、より充実した学会活動を目指して、事業を展開したいと考えています。平成 21 年度の年会は小原雄治年会長によって横浜で、また平成 22 年度は谷口維紹年会長の指揮の下神戸でそれぞれ開催されます。年会に続く大きな行事となった春期シンポジウムは、平成 21 年度は中山建男世話人によって宮崎での開催準備が進められており、平成 22 年度は大隅典子世話人によって仙台での開催が予定されています。

学会活動の第二の柱である Genes to Cells 誌の編集出版業務については、柳田編集長と上村匡編集幹事の努力によって出版社と新たな内容で契約し、学会収支が大幅に改善されました。また、編集業務を見直し、同誌の今後の方向を議論するワーキンググループを発足させることにしました。

委員会については、研究倫理委員会および男女共同参画委員会はいずれも重要な活動として定着しており、第 16 期においても継続して活動していただくことにしました。また、新たに学術事業企画委員会を設置して、分子生物学の今後の研究方向に焦点を合わせた企画出版の可否について検討を始めることになりました。

一方、研究・教育活動に関する最近の社会情勢はますます厳しくなっており、大学や研究所は資金的余裕を失って内向きになり、研究者コミュニティに対する目配りが困難になっています。このような状況に対応した本学会のあり方を広く議論する必要があると考え、将来計画検討委員会を設置して学会の将来像について広く検討することになりました。

本学会の活動に対する皆様のご協力とご支援および議論への参画をお願い致します。

平成 21 年 2 月

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第 16 期理事長
(自然科学研究機構・基礎生物学研究所長)
岡田 清孝

第16期 役員・幹事・各委員会名簿

(任期：2008年10月1日～2010年9月30日)

理事長

岡田 清孝 (基生研)

副理事長

鍋島 陽一 (京大・医)

町田 泰則 (名大・理)

理事

相沢 慎一 (理研・CDB)

審良 静男 (阪大・微研)

上村 匡 (京大・生命)

貝淵 弘三 (名大・医)

片山 勉 (九大・薬)

小安 重夫 (慶應大・医)

篠崎 一雄 (理研・PSC)

白髭 克彦 (東工大・生命理工)

田畑 哲之 (かずさDNA研)

永田 恭介 (筑波大・基礎医学)

正井 久雄 (都臨床研)

水島 昇 (東医歯大・医歯)

山中 伸弥 (京大・再生研)

渡邊 嘉典 (東大・分生研)

饗場 弘二 (名大・理)

荒木 弘之 (遺伝研)

大隅 良典 (基生研)

影山龍一郎 (京大・ウイルス研)

加藤 茂明 (東大・分生研)

塩見 春彦 (慶應大・医)

篠原 彰 (阪大・蛋白研)

杉本亜砂子 (理研・CDB)

辻本 賀英 (阪大・医)

長田 重一 (京大・医)

升方 久夫 (阪大・理)

柳田 充弘 (京大 / 沖縄科学技術研究機構)

山本 正幸 (東大・理)

(50音順)

監事

小川 智子 (岩手看護短大)

吉川 寛 (阪大 / 奈良先端大、名誉教授)

各幹事

庶務幹事 石野 史敏 (東医歯大・難治研)

会計幹事 塩見 春彦 (慶應大・医)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 (HP) 加藤 茂明 (東大・分生研)

集会幹事 (年会) 小林 武彦 (遺伝研)

宮園 浩平 (東大・医)

Genes to Cells 編集長 柳田 充弘 (京大 / 沖縄科学技術研究機構)

Genes to Cells 将来計画ワーキンググループ 荒木 弘之、林 茂生、平岡 泰、宮園 浩平

賞推薦委員会

田畑哲之 (委員長)、大隅良典、小安重夫、篠崎一雄、辻本賀英

研究助成選考委員会

町田泰則 (委員長)、荒木弘之、貝淵弘三、影山龍一郎、升方久夫

男女共同参画委員会

杉本亜砂子 (委員長)、篠原 彰 (副委員長)、井関祥子、漆原秀子、大杉美穂、大隅典子、金井正美、田畑哲之、福田公子、本間美和子、松尾 勲、松崎文雄、大坪久子 (アドバイザー)

研究倫理委員会

柳田充弘 (委員長)、小原雄治、田中啓二

〈研究倫理委員会下部組織〉

論文調査ワーキンググループ

釣本敏樹 (WG 委員長)、伊藤建夫、片山 勉、木村 宏、篠原 彰

【※論文調査WGはすべての作業を終えた時点で任期終了。】

若手教育問題ワーキンググループ

中山敬一 (WG 座長)、上田泰己、加藤茂明、水島 昇、山中伸弥

学術事業企画委員会 (近日中に設置予定)

永田恭介 (委員長)

将来計画検討委員会 (近日中に設置予定)

山本正幸 (委員長)

日本分子生物学会第9回春季シンポジウム「分子生物学の新たな胎動～宮崎から黎明の曙光～」のご案内

日本分子生物学会第9回春季シンポジウムを以下の要領で宮崎で開催します。内容の詳細については近日中にホームページに掲載しますが、予定している計画の概要は以下のとおりです。会員の皆様のご協力および多くの方のご参加・ポスター発表をお願い致します。

(<http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/2bio/mbsj2009/>)

開催概要

テーマ：「分子生物学の新たな胎動～宮崎から黎明の曙光～」

会 期：2009年5月10日(日)～12日(火)

* 10日(日)は市民公開講座を開催（下記を参照）

会 場：シーガイア ワールドコンベンションセンター・サミット
(〒880-8545 宮崎市山崎町浜山)

(Tel：0985-21-1111 FAX：0985-21-1144)

* 宮崎空港より車で約20分、JR宮崎駅より車で約15分)

* 講演会場：ホール（天蘭、天玉）（4階）

* ポスター会場：ホール（天樹）（4階）

世話人：宮崎大学フロンティア科学実験総合センター

医学部機能制御学講座機能生化学分野

教授 中山 建男

事務局：〒889-1692

宮崎大学フロンティア科学実験総合センター

医学部機能制御学講座機能生化学分野

Tel：0985-85-3127 FAX：0985-85-6503

E-mail：fsrc_med@med.miyazaki-u.ac.jp

プログラム概要：

・特別講演：1 演題

松尾壽之（宮崎医科大学名誉教授）

・シンポジウム：16 演題（敬称略、順不同）

清木元治（東大・医科研）、佐藤隆一郎（東大・農）、加藤茂明（東大・分生研）、白髭克彦（東工大）、須田年生（慶應大・医）、塩見春彦（慶應大・医）、西田栄介（京大・生命科学）、鍋島陽一（京大・医）、影山龍一郎（京大・ウイルス研）、升方久夫（阪大・理）、米田悦啓（阪大・生命機能）、藤木幸夫（九大・理）、中山敬一（九大・生体防御研）、田賀哲也（熊大・発生研）、藤山秋佐夫（国立情報研）、田中啓二（東京都臨床医研）

・ポスター：約70 演題（一般募集）

（申込み締切り予定日：2009年3月31日）

分野を問わず一般募集。若手研究者・大学院生の積極的参加を希望します。

プログラムスケジュール（予定）：

5月11日(月)：

8：50～9：00 開会の挨拶

9：00～10：20 シンポジウム1、2

10：35～11：55 シンポジウム3、4

13：10～14：20 ポスター・セッション

14：30～15：50 シンポジウム5、6

16：05～18：05 シンポジウム7、8、9

18：20～20：20 懇親会・ミキサー

参加費（一般 5,000円、学生 1,000円）

5月12日(火)：

9：00～10：20 シンポジウム10、11

10：35～11：55 シンポジウム12、13

13：10～14：10 特別講演

14：25～16：25 シンポジウム14、15、16

16：25～16：30 閉会の挨拶

市民公開講座：

春季シンポジウムに先立って、以下の要領で開催します。

日 時：2009年5月10日(日) 14：00～16：00

場 所：宮崎観光ホテル

(〒880-8512 宮崎市松山1-1-1)

(Tel：0985-27-1212 FAX：0985-25-8748)

* 宮崎空港より車で約15分、JR宮崎駅より車で約5分)

講演者：吉川 寛（大阪大学名誉教授、奈良先端科学技術大学院大学名誉教授）

近藤 滋（名古屋大学大学院理学研究科教授）

（なお、春季シンポジウム、市民公開講座とも参加費は無料です）

第32回日本分子生物学会年会 開催のお知らせ（その1）

分子生物学会の原点 —すべては議論から—

会 期：2009年12月9日(水)～12日(土)（4日間）
会 場：パシフィコ横浜
年 会 長：小原 雄治（情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所）
副 年 会 長：荒木 弘之（情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所）
演 題 登 録 期 間：2009年8月3日(月)～8月28日(金)予定
事前参加登録期間：2009年8月3日(月)～10月30日(金)予定
*上記はあくまで予定であり、若干前後する可能性もあります。
年会事務局連絡先：第32回日本分子生物学会年会事務局
〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-63 新大阪千代田ビル別館9階
Tel：06-6350-7247 Fax：06-6350-7248 E-mail：mbsj2009@aeplan.co.jp
URL：http://www.aeplan.co.jp/mbsj2009/

【年会のコンセプト】

分子生物学会の年会は例年盛会で、参加者も数千人に及ぶようになりました。その華やかさと相反して、プログラムに追われ十分な議論が出来ないという声も聞きます。単に結果の発表やそれを聞くだけではなく、発表結果やアイデアについて参加者相互が十分に議論を深め、将来の研究の方向や新たなアイデアの創成を行うことこそが学会本来の姿ではないでしょうか。そこで本年度は「分子生物学会の原点—すべては議論から—」というテーマのもと、年会がより広く、効果的な「議論する場」となるべく、以下のようなコンセプトで様々な企画・準備を進めています。会員の皆様より積極的なご提案ご参加をいただきますよう、お待ちしております。

○ “議論” の活性化！

一日1,000演題のポスターが一つの会場にまとまるという利点を活かし、ポスター会場での発表／討論を重視し、充実させます。そのための様々な仕掛けを検討中です。例えば、ディスカッサーを配置し、ポスター毎の質疑・討論を予定しています。

○ “国際性” の向上！

シンポジウムは要旨・講演ともに英語とし、各シンポジウムに複数の若手PIを中心とする海外演者を招聘する予定です。また、海外演者にもポスター討論など年会プログラムへの積極的な参加の仕組みを考案しています。ポスターを含め、要旨は英語での執筆を推奨します。

○ “IT” の積極活用！

プログラムは印刷物を作成・送付しますが、要旨集はオンライン化し、印刷物を廃止します。参加登録者はパスワード・IDを用いて年会ホームページから要旨等の閲覧・検索・ダウンロードができます。会場ではPC・携帯電話にて検索・閲覧・その他サービスを利用できるようにします。

○ “社会との関係” も！

男女共同参画、若手倫理教育、さらにはポストク問題に対応して企業や研究以外の人たちとの接点創成など、様々な企画をサイエンスセッションとのバランスを考慮しつつ進めていきます。

【セッション構成（予定）】

- 午 前：シンポジウム（分野を越えて多くの会員が聞きたい内容や将来の分子生物学の方向性を議論するような内容を含んだもの。英語での進行によるインターナショナルなセッションとします。）
- 昼 食 時：ランチョンセミナーや各種フォーラム
- 午後前半：ワークショップ（特定のトピックスに焦点を絞ったもの。ポスターからもピックアップ。）
- 午後後半：ポスターセッション（ポスターセッション後半からはミキサーとし、活発な会員同士のディスカッションを期待しています。）
- 夜 ：各種フォーラムなど

○シンポジウム

組織委員会の企画によるものに、会員より公募し採択されたものを加え、1テーマあたり2時間30分の時間枠で8つのシンポジウムが同時進行します（合計24テーマ）。

募集要領は後述の『シンポジウム・ワークショップ企画公募について』をご参照ください（公募締切：2009年3月27日（金））。

〈組織委員企画のシンポジウム（最新の情報は年会ホームページをご覧ください）〉

染色体構造と微小管ダイナミクス（仮題）

オーガナイザー：深川 竜郎（国立遺伝研），Iain M. Cheeseman（MIT）

予定スピーカー：深川 竜郎（国立遺伝研），Iain M. Cheeseman（MIT），ほか海外演者を含む数名を予定

細胞分裂期において、ゲノム情報は染色体中にコンパクトに収納された後、微小管が染色体に結合して染色体分配が遂行される。染色体分配の分子機構を明らかにするためには、染色体そのものの構造と染色体分配を牽引する微小管動態の両面から解明する必要がある。本シンポジウムでは、分裂期の染色体構造の形成に必要なメカニズム、微小管と染色体の結合メカニズム、微小管動態など、染色体構造と微小管動態に焦点をあてた研究について様々な角度から議論する。遺伝学、細胞生物学、生化学、構造生物学の融合で様々な新発見が明らかにされる本研究分野の今後の展望について理解できるシンポジウムを目指す。

エピゲノム研究が拓く新しい生命科学－Emerging Power of Epigenomics in Life Science

オーガナイザー：佐々木 裕之（国立遺伝研），Young-Joon Kim（Yonsei Univ.）

予定スピーカー：Young-Joon Kim（Yonsei Univ.），牛島 俊和（国立がん研），

角谷 徹仁（国立遺伝研），佐々木 裕之（国立遺伝研），ほか1～2名

マイクロアレイや次世代シーケンサーを用いたエピゲノム解析技術の進歩により、さまざまな細胞のエピジェネティックな修飾状態を全ゲノム規模で記述することが可能になった。それらのデータをもとに幹細胞やがんの特性が明らかにされつつあるほか、新たな細胞機能の作動原理が浮かび上がりつつある。正常・疾患をふくめエピゲノム研究の最前線を展望する。

生体における時計機構とそのアウトプット制御機構

オーガナイザー：相賀 裕美子（国立遺伝研）および海外研究者予定

予定スピーカー：深田 吉孝（東大），ほか海外演者を含む数名を予定

生物時計による制御は多くの生物でみられる共通のメカニズムである。時計遺伝子群の発見から約10年、その分子機構の解析には目を見張るものがあり、時計機能の実体として、ネガティブフィードバックを介した分子の振動が明らかになっている。このシンポジウムでは脊椎動物の発生過程における体節時計が、我々の体の分節性を生み出す機構、また我々地球上にすむ生物で共通して機能する体内時計がどのようなメカニズムで多くの生命現象を制御しているのかという点に焦点をあてる。それぞれの時計の周期性を作り出すメカニズム、またその時計からの情報の読み取りとその変換機構に関する最新の知見を議論したい。

不等分裂の分子生物学

オーガナイザー：小林 武彦（国立遺伝研）および海外研究者予定

予定スピーカー：海外演者を含む数名を予定

多細胞生物の分化は細胞の不等分裂によって引き起こされることが知られている。最近、これまで不等分裂とは関係が薄いと考えられていた単細胞生物や細菌の細胞分裂においても不等分裂がみられることが報告されている。また蛋白質、RNA、オルガネラに加えて、プラスミドや染色体と言ったDNAの不等分配も新たに見いだされている。細胞内でこれらの分子や構造体がどのように選別され能動的に不等分配されているのか。様々な生物での最新の研究結果からその分子機構の普遍性と特殊性について議論する。

The mechanism of stem-cell maintenance during early stages of plant reproductive development

オーガナイザー：野々村 賢一（国立遺伝研）、荒木 崇（京大）

予定スピーカー：海外演者を含む数名を予定

During early stages of reproductive development, plant stem cells in the shoot apical meristem generate inflorescence and floral organs in which germ cells are differentiate and fertilization is finally achieved. These processes are controlled by complicated gene networks. This symposium will focus on the genetic mechanism controlling a series of early events in plant reproduction: maintenance and termination of reproductive meristem, and consequent germ-cell initiation.

神経回路形成と可塑性を司る多様な分子メカニズム

オーガナイザー：榎本 和生（国立遺伝研）および海外研究者予定

予定スピーカー：海外演者を含む数名を予定

脳神経ネットワークが個体にとって真に機能的である為には、遺伝情報に基づくハードワイアリングだけでは不十分であり、個体ごとに異なる外部環境に対応しその経験を情報として回路を再編する可塑性が重要となる。近年、in vivo イメージングとゼブラフィッシュやショウジョウバエ、線虫などのモデル生物を用いた分子遺伝学的手法を組み合わせることにより、神経回路形成と可塑性を支える分子システムを網羅的に同定しようとする試みが急速に進展している。一方では、構造的可塑性と神経機能変化を同時に可視化できる技術も開発されている。本シンポジウムでは、遺伝子発現、分子機能、シナプス形成、神経突起パターン形成など様々な階層における神経可塑性について最新の成果を発表して頂き、ニューロンが遺伝情報と細胞外情報を統合して機能的ネットワークを構築・維持する基本原理について討議したい。

行動の分子遺伝学的基盤を理解するための新戦略

— Molecular and genetic approaches toward understanding behavior

オーガナイザー：小出 剛（国立遺伝研）、Abraham A. Palmer (Univ. of Chicago)

予定スピーカー：Abraham A. Palmer (Univ. of Chicago)、古市 貞一（理研 BSI）、
宮川 剛（藤田保衛大）、小出 剛（国立遺伝研）ほか

動物が示す移ろい行く行動を分子という物質レベルで説明することは、行動を理解する上で最終的な目標とも言える。その行動の基盤を分子遺伝学的に理解してゆこうとする試みは、近年目覚ましい進歩を見せつつある。その中であって、研究者はどの動物種を用いてどのような手法で望んでゆけばよいのか知恵を絞ることを迫られている。本シンポジウムでは無脊椎動物から哺乳類まで、それぞれの研究上の利点を生かした様々なアプローチと、そこから得られた行動と分子遺伝学的基盤の最新の知見を紹介する。

神経回路を基盤とするシステム分子行動学

オーガナイザー：飯野 雄一（東大）ほか

予定スピーカー：海外演者を含む数名を予定

動物の行動の多くは、遺伝子により規定されているが、遺伝子と動物行動との間には大きな階層の隔りがある。しかし、近年の分子生物学および周辺領域の発展はこのギャップにメスを入れることが可能となりつつあることを予感させる。この興隆しつつある学問領域の現状を報告し、今後の発展のための戦略を議論する。

超大量 DNA シーケンシングが拓く分子生物学の新展開

オーガナイザー：藤山 秋佐夫（国立情報研／国立遺伝研），菅野 純夫（東大）

予定スピーカー：油谷 浩幸（東京大），黒川 顕（東工大），藤山 秋佐夫（国立情報研／国立遺伝研），
菅野 純夫（東大），ほか海外演者を含む数名を予定

その登場以来、DNA シーケンシングは分子生物学研究の重要なコア技術となっており、現在でも高精度化と大規模化をキーワードに発展を続けている。数年前に実用化が始まったいわゆる次世代型シーケンサは、従来型のサンガー法シーケンサの数 100 倍以上の効率化を実現しており、一度の運転で数 GB の配列データを生み出す能力を持つ。このため、ゲノムや cDNA の塩基配列解析以外に、高いリニアリティを持つ核酸分子計測装置としての性格も持つことから、新しい生物学研究ツールとして大きな期待が持たれている。本シンポジウムでは、次世代型ギガシーケンシングを軸に、技術開発と研究の現況と将来像について、国内外の第一線の研究者による発表と意見交換をおこない、特に若い研究者層に最新のゲノム研究への興味を喚起する。

Recent progress on the concept for the nuclear architecture controlling genome function

オーガナイザー：原田 昌彦（東北大）ほか

予定スピーカー：城石 俊彦（国立遺伝研），平岡 泰（阪大），原田 昌彦（東北大），
ほか海外演者 2～3 名予定

真核生物の細胞核は、高度に組織化・区画化されたダイナミックな構造体である。この構造に基づくクロマチンの核内収納は遺伝情報の発現制御・維持継承における重要な分子基盤の一つであり、分化・疾病などと関連した核内構造の変化も観察されている。近年、このような核の機能構造形成に核膜構造（核膜孔複合体、核ラミナなどを含む）が重要な役割を果たすことが認識されてきた。一方、核内部の構造特性（染色体テリトリーやクロマチン空間配置など）を説明する基本原理やメカニズムには不明な点が多いが、最近の研究によって、細胞機能に対応した核構造ダイナミクスや、それを担うタンパク質についての情報も蓄積されている。そこで本シンポジウムでは、この時期を捉え、国内外の関連研究者が最新の成果を紹介すると共に、そこから提唱される核内構造の基本原理と機能構造相関における新たなコンセプトに対して、活発な意見交換を行うことを目的とする。

New Horizons of Chromosome Dynamics

オーガナイザー：荒木 弘之（国立遺伝研）および海外研究者予定

予定スピーカー：Thomas A. Rando（スタンフォード大），ほか海外演者を含む数名を予定

染色体は遺伝情報を担い、複製、凝縮、分配を繰り返し、娘細胞に受け継がれて行く。さらに、障害を受ければ修復され、生殖細胞では組換えにより遺伝子のシャッフリングが起こる。これらの研究は面々として行われて来たが、ここではこれらの最先端の研究を俯瞰するとともに、染色体動態の新たな研究方向について議論する。

Frontiers of medical researches based on comprehensive genome analysis

オーガナイザー：辻 省次（東大）および海外研究者予定

予定スピーカー：辻 省次（東大），ほか海外演者を含む数名を予定

DNA microarray を用いたゲノム全域の SNP typing から、次世代シーケンサーを用いた全ゲノム配列再解析まで、ゲノム解析技術の発展には目を見張るものがある。このような解析技術の発展により、疾患の発症に関与する疾患関連遺伝子の探索が飛躍的に加速されるものと期待されている。本シンポジウムでは、ゲノム解析技術の発展が疾患関連遺伝子の探索にどのようなインパクトを与えているか、がん、生活習慣病、神経疾患などに焦点を当て、国内外の第一線の研究者による発表と意見交換をおこない、ゲノム医学研究のフロンティアを探る。

○ワークショップ

会員より公募します。1 テーマあたり 2 時間 30 分の時間枠で、14 のワークショップが同時進行する予定です（合計約 50 テーマ）。

募集要領は後述の『シンポジウム・ワークショップ企画公募について』をご参照ください（公募締切：2009 年 3 月 27 日（金））。

○一般演題（ポスター発表、ワークショップへの採択）

演題登録期間：2009年8月3日(月)～8月28日(金)（予定）

採択された全ての一般演題は、ポスター発表を行っていただきます。

また、ワークショップへの口頭発表採択希望を募り、審査のうえ採択された演題については口頭での発表も行っていただきます。

演題申込みに関する詳細は、会報93号（6月発行予定）および決定次第年会ホームページにてお知らせします。

なお、演題の登録には、日本分子生物学会の会員であることが必要です。未入会の方はお早めに入会手続きをお済ませください。

○バイオテクノロジーセミナー（ランチョンセミナー）

○市民公開講座

○その他企画（男女共同参画、若手倫理教育、バイオリソース展示、データベース紹介等）

【シンポジウム・ワークショップ企画公募について】

年会では、シンポジウムおよびワークショップの企画を会員の皆様より公募いたします。

ご提出いただいた企画案の採否結果は4月中旬頃に応募者へご連絡いたします。

本学会に占める女性会員の割合に比べますと、シンポジウム・ワークショップでの女性オーガナイザーやスピーカーの割合が少ない傾向にあります。女性オーガナイザーによる企画を歓迎するとともに、スピーカーに女性研究者の積極的な登用をお願いします。

各募集要項をご確認のうえ、奮ってご応募ください。ユニークな企画をお待ちしております。

○シンポジウム企画：2009年3月27日(金)締切

〈募集要項〉

- ・1テーマあたり2時間30分の時間枠です。
- ・年会で違った分野の話を聞ける機会が減っていますので、専門外の人も聞いてみたいと思うようなものであり、また専門外の人にも分かるようなもの、また分野横断的なもの、を歓迎します。
- ・オーガナイザーが国内の研究者と国外の研究者という組合せを歓迎します。
- ・少なくとも2名の海外演者（PIであること）を含み、「英語」で講演・進行していただきます。若手PIの招聘を歓迎します。
- ・シンポジウムの午後のポスターセッションにおいて、シンポジウムのポスター（1枚）を出していただき、演者を囲んだディスカッションの機会を持ちたいと考えています。
- ・海外からの演者招聘のため、年会から1シンポジウムあたり40万円を上限として補助を予定しています。また、海外演者の年会参加のための会期中の宿泊（会場より徒歩5分のナビオス横浜を予定）は、年会本部で用意します（上記補助費には含まれません）。
- ・国内演者については、会員・非会員に関わらず、旅費・宿泊費・謝金等の支給はできません。ただし、非会員演者は参加登録費を免除させていただきます。
- ・約10テーマを採択します。

〈応募要領〉

下記事項をご記入のうえ、3月27日(金)までに年会事務局までE-mailにてご提出ください。

- 1) テーマタイトル（和文・英文）
- 2) オーガナイザーの氏名・所属（2名）
- 3) 概要（400字程度）
- 4) 予定演者の氏名・所属（応募時での演者による講演承諾は不要です）
- 5) 連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
- 6) 予想される聴衆数

○ワークショップ企画：2009 年 3 月 27 日(金)締切

〈募集要項〉

- 1 テーマあたり 2 時間 30 分の時間枠です。
- 進行は日本語でも結構ですが、外国人を招聘された場合は、なるべく英語での進行をお願いします。
- ご提案いただくオーガナイザーは、両名とも日本分子生物学会の会員に限ります。
- 演者につきましては、オーガナイザーにてご指定いただく方のほか、可能な限り一般演題からの採択も行っています。
- 海外から演者招聘される場合は、年会から 1 ワークショップあたり 10 万円を上限として補助を予定しています。
- 国内演者については、会員・非会員に関わらず、旅費・宿泊費・謝金等の支給はできません。ただし、非会員演者は参加登録費を免除させていただきます。
- 8 月末の演題投稿後に予定されるプログラム編成スケジュールが大変タイトなため、提出物等の締切厳守を予めご了承ください。
- 約 50 テーマを採択します。

〈応募要領〉

下記事項をご記入のうえ、3 月 27 日(金)までに年会事務局まで E-mail にてご提出ください。

- 1) テーマタイトル (和文・英文)
- 2) オーガナイザーの氏名・所属 (2 名)
- 3) 概要 (400 字程度)
- 4) 使用言語 (日本語・英語)
- 5) 予定演者の氏名・所属 (応募時での演者による講演承諾は不要です)
- 6) 両オーガナイザーの氏名、連絡先
- 7) 予想される聴衆数

第 32 回日本分子生物学会年会に関するお問合せ

第 32 回日本分子生物学会年会事務局

〒 532-0003 大阪市淀川区宮原 4-4-63 新大阪千代田ビル別館 9 階

Tel : 06-6350-7247 Fax : 06-6350-7248 E-mail : mbsj2009@aeplan.co.jp

URL : <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2009/>

【第 32 回日本分子生物学会年会 組織委員一覧】

〈年会長〉

小原 雄治（国立遺伝学研究所）

〈副年会長〉

荒木 弘之（国立遺伝学研究所）

〈幹 事〉

小林 武彦（国立遺伝学研究所）

深川 竜郎（国立遺伝学研究所）

〈アドバイザー〉

桂 勲（国立遺伝学研究所）

〈組織委員〉

明石 裕（国立遺伝学研究所）

池尾 一穂（国立遺伝学研究所）

岩里 琢治（国立遺伝学研究所）

上田 龍（国立遺伝学研究所）

瓜谷 真裕（静岡大学）

大久保公策（国立遺伝学研究所）

加治 和彦（静岡県立大学）

北川 雅敏（浜松医科大学）

倉田 のり（国立遺伝学研究所）

五條堀 孝（国立遺伝学研究所）

相賀裕美子（国立遺伝学研究所）

佐々木裕之（国立遺伝学研究所）

嶋本 伸雄（国立遺伝学研究所）

白木原康雄（国立遺伝学研究所）

瀬藤 光利（浜松医科大学）

高野 敏行（国立遺伝学研究所）

豊田 敦（国立遺伝学研究所）

仁木 宏典（国立遺伝学研究所）

平田たつみ（国立遺伝学研究所）

藤山秋佐夫（国立情報学研究所 / 国立遺伝学研究所）

蓑島 伸生（浜松医科大学）

山崎由紀子（国立遺伝学研究所）

浅井 章良（静岡県立大学）

稲葉 一男（筑波大学 下田臨海実験センター）

上田 啓次（浜松医科大学）

丑丸 敬史（静岡大学）

榎本 和生（国立遺伝学研究所）

角谷 徹仁（国立遺伝学研究所）

川上 浩一（国立遺伝学研究所）

木村 暁（国立遺伝学研究所）

小出 剛（国立遺伝学研究所）

斎藤 成也（国立遺伝学研究所）

酒井 則良（国立遺伝学研究所）

柴原 慶一（国立遺伝学研究所）

城石 俊彦（国立遺伝学研究所）

鈴木えみ子（国立遺伝学研究所）

高木 利久（情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター / 国立遺伝学研究所 / 東京大学）

中村 保一（国立遺伝学研究所）

野々村賢一（国立遺伝学研究所）

広海 健（国立遺伝学研究所）

三浦 直行（浜松医科大学）

山尾 文明（国立遺伝学研究所）

山本 歩（静岡大学）

2009 年 1 月現在

第31回日本分子生物学会年会 年会報告

第31回日本分子生物学会年会は、第81回日本生化学会大会との合同大会（BMB2008：Biochemistry and Molecular Biology 2008）として、昨年12月9日（火）～12日（金）の4日間、神戸ポートアイランドにて開催いたしました。

昨年度に引き続き合同大会として開催するにあたり、第81回日本生化学会大会の大隅良典会頭をはじめ、組織委員幹事会にて何度も話し合いの機会をもち、昨年に増して合同大会としての意義が図られるよう、検討を続けました。

ノーベル賞受賞者を含む著名な研究者4名によるプレナリーレクチャーや、会員からのシンポジウム企画の公募、若手研究者・学生による口頭発表の積極採用など、学術プログラムの充実に力を注ぎました。また、「Late-Breaking Abstracts」として、夏の演題投稿締め切り後に新たなポスター演題を募集し、発表の機会を拡げました。さらに、参加者の交流の場となるような懇親会企画の工夫や、検索機能を充実させたCD-ROMの作成、バイオテクノロジーセミナー（ランチョンセミナー）の整理券制の導入、当日参加登録者への印刷物講演要旨集配布の廃止など、これまでの両学会の慣習にとらわれず、様々な変革を行いました。

新しく取り入れた試みが、はたしてうまくいくかどうか不安でした。実際、講演要旨集を別途、購入してもらうことになった当日参加登録者の数名から不満の声が上がりました。また、本年会がノーベル賞授賞式の時期と重なることで、海外招聘演者の確定が難しいことなど、課題はいくつか残りました。ご不便・ご迷惑をお掛けした方々に深くお詫び申し上げます。上記のような課題は

残ったものの、大会当日は大きな混乱もなく、11,500名を超える多くの方々にご参加いただきました。また、分子生物学会・生化学会の垣根を超えて、生命科学における幅広い領域から過去最多となる5,703題の一般演題が集まり、シンポジウム等の講演もあわせ、計6,366題の発表が行われ、各会場で大いに活発な議論・情報交換・人的交流がなされました。若い研究者を中心に、熱心な議論で盛り上がる各会場の様子を眺めながら、このような議論の場から、将来の生命科学をリードする研究者が育ち、その研究が世界へ発信されていくことを、強く確信いたしました。本大会が日本の生命科学のさらなる発展の為にすこしでもお役に立てたのであれば、主催者の一人として、幸甚の極みであります。

本大会を成功裏につつがなく終了できましたことを、合同大会の開催に理解を示してくださいました本学会および生化学会の役員の皆様、プログラムの編成などで年会の企画・運営にご協力くださいました組織委員各位、オーガナイザー・座長・講演者の先生方、全国よりご参加くださいました皆様、そして多大なる援助を頂きました出展・ランチョンセミナー主催企業、助成諸団体に心より御礼申し上げます。また、年会のために献身的に仕事をされた峰崎愛さんをはじめとするBMB事務局、学会当日の数多くのスタッフの方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

2009年2月

第31回日本分子生物学会年会（BMB2008）

年会長 長田 重一

学会誌「Genes to Cells」に関する報告

編集幹事 上村 匡

【出版契約について】

出版元であるBlackwell PublishingがJohn Wiley & Sonsに吸収合併されたことに伴い、本誌の契約内容を抜本的に見直すべく、2年をかけて進めてきた改定版の契約書が完成し、本学会と出版社による調印が行われました。契約内容は2008年1月にさかのぼって発効され、これにより学会誌発行に掛かる学会の収支は大幅に改善される見込みです。

【編集体制について】

第16期の理事会において、次期編集長の人選や新たな

編集体制についてしっかりと検討するワーキンググループ（WG）を作るべきではないかと岡田理事長が提案され、「Genes to Cells 将来計画ワーキンググループ」の設置が承認されました。本誌のステータスをさらに向上させるため、WGにてその詳細を検討していくこととなりますが、WGの構成メンバーは、岡田理事長と編集幹事で検討し、柳田編集長と協議の上、下記のとおりになりました。柳田編集長には当初予定していた3年の任期以降も、しかるべき時期まで担当していただくこととなりました。

GtC 将来計画 WG：荒木弘之、林茂生、平岡泰、宮園浩平

研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告

去る平成20年12月9日(火)に神戸国際会議場において、分子生物学会・若手教育シンポジウム『今こそ示そう科学者の良心 2008 —みんなで考える科学的不正問題』(主催:特定非営利活動法人 日本分子生物学会、協賛:共立出版株式会社)が行われた。本シンポジウムは、昨年に引き続き第二回目の開催であるが、今年度は、講演(第一部)、若手パネルディスカッション(第二部)、中堅・シニアパネルディスカッション(第三部)の三部構成で行い、約250名の参加者があった。特に第一部では、若手教育問題ワーキンググループと同じく研究倫理委員会の下部に属する「論文調査ワーキンググループ」からの調査結果の報告という重大な発表があった。議論は大いに盛り上がり、参加者からは概ね好評を得たが、同時に多くの問題提起もなされた。本稿では、このシンポジウムの概略とアンケート結果に基づいた客観的分析、さらに今後の若手教育のあり方について述べる。

(文責:若手教育問題ワーキンググループ座長 中山 敬一)

まず本題に入る前に、本シンポジウム開催までの背景について簡単に述べておきたい。若手教育問題ワーキンググループにおける大きな活動目標の一つは、科学的不正防止のための啓発活動である。その活動の中で最大のものは本シンポジウムであるが、昨年度は秀潤社「細胞工学」誌とタイアップして、誌上座談会や学会探訪記事を掲載するなど、より効率的な意見の発信を行った。本年度も同様に本シンポジウムと科学誌とのタイアップを企画し、シンポジウムという限られた時間内では語り尽くせない議論を行いたいと考えた。そこで共立出版社「蛋白質 核酸 酵素 (以下、PNE)」誌上で連載『正しい知識が捏造を防ぐ — データを正確に解釈するための6つのポイント』と題して、下記の6つの平易で身近な論点につき解説を行った(または行う予定である)。

- 1) 「Photoshopによるゲル画像の調整」中山敬一(PNE 2008年12月号)
- 2) 「蛍光顕微鏡データの誤った解釈」水島昇、鈴木邦律(PNE 2009年2月号)
- 3) 「客観的判断の難しい事例をどう扱うか? ~ 定量化的方法と代表例の選び方を主題として ~」齋藤成昭(PNE 2009年4月号)
- 4) 「微妙なデータをどう表現するか(仮題)」加藤茂明(PNE 2009年6月号)
- 5) 「大規模データの解析における問題点(仮題)」上田泰己(PNE 2009年8月号)
- 6) 「はずれ値をどう扱うか(仮題)」山中伸弥(PNE

2009年10月号)

本連載では、われわれが日常的に直面している問題や方法について、その原理を解説すると共に、陥りやすいミスに対する注意点や、解釈が難しいポイントなどを挙げ、執筆者の見解を述べている。また執筆者からの一方通行の発信ではなく、読者からの質問や意見に対して、次号にて執筆者が回答を載せるといった双方向の試みを行っており、将来的なコンセンサスの形成を目指している。また、この連載で特に気を付けたことは、単なる綺麗事ではなく、現場として実際に苦悩する点について率直な意見や見解を述べている点であり、本シンポジウム紹介記事と併せてお読みいただければ幸いである。

I. シンポジウムの概要

(座長:加藤 茂明、水島 昇)

(※全文は分子生物学会のWEBサイトに掲載されていますので、そちらも是非ご覧下さい)

【第一部:講演】

釣本敏樹氏(九州大学)

「論文調査ワーキンググループからの報告」

論文調査ワーキンググループは、杉野元阪大教授の論文捏造問題について、客観的な事実に基づいて、できるだけ中立の立場で、問題の背景、プロセス、あるいは周囲の対応などを調べ、今後の分子生物学を健全に発展させるための教訓を提示することを目的とし、研究倫理委員会の下部組織として、2007年の4月から活動を開始している。今までにワーキンググループを8回行い、20名の関係者から聞き取り、あるいは書面調査などを行った。2008年9月27日に調査報告書を提出し、既に日本分子生物学会のホームページ上で公開されている。実際に複数の論文を精査した結果、明らかに疑わしいデータが存在した。さらにその背景について、杉野元教授の個人的な特性、つまり研究者としてのモラルの低さに帰することができると多々認められた。また作業を分業化することによって、実験結果や論文のデータに対して責任の所在が非常にあいまいになっているという問題があった。この事例から浮かび上がってきた問題点は、PIのモラルや責任をもう一度考えなければいけないということ、若手研究者を自覚ある研究者へと育てていく方策を立てなくてはならないということ、そして学術雑誌の方の問題として、投稿するときの論文の構成等をいかにチェッ

クするか、等である。これらに対して、研究を量だけでなく、質や内容を十分検討できるだけの評価方法の確立がPIのモラル向上のためにも必要である。また若手研究者も自分の研究の成果に対して、それが公正に行われているということを判断できる責任感を自ら持つ必要がある。その他、学位の質の確保や研究者が率直に語り合える場の創出、学術雑誌の論文のチェック体制の強化等が、このような問題を防ぐことにつながるだろう。

【第二部：若手パネルディスカッション】

若手パネルディスカッションでは、石川善則氏（東北大学）、依光朋宏氏（東京大学）、池上徹氏（東京大学）、金美善氏（東京医科歯科大学）、青井貴之氏（京都大学）、柿原研氏（神戸大学）、洲崎悦生氏（九州大学）の7名の若手に登壇していただき、日常的に研究倫理のあり方について感じていることや学会に対する要望等、率直に意見を述べてもらった。以下に主要な話題・意見を抜粋する。

- 若手にアンケート調査をしたところ、9割以上の人が研究不正問題に対して非常に関心ある反面、具体的な情報や規定に関する知識は非常に乏しいことがわかった。
- 若手は知識不足から不適切なデータの取り扱いをしてしまう恐れがあるので、適切な教育機会を望んでいる。
- 若手の約3分の2は研究不正を防ぐような雰囲気醸成が大切と感じているが、残り3分の1は厳しい罰則規定も大切と考えている。
- 東北大では啓蒙活動としてパンフレットを作成しており、さらに相談室を設置して、研究不正の防止に向けた活動をしている。
- 先人が積み重ねてきたものに対する畏敬の念がミスコンダクトを防ぐ。
- プレッシャーがかかったシチュエーションに置かれたとき、人間は誇りだけでは食べていけない。
- インパクトファクター万能主義に対する批評として、社会計量学的には、インパクトファクターと学会の評価はイコールではないということが既に示されている。
- 不正告発の窓口を作るべきだ。
- 米国では、学生やPIに対して、研究倫理に関する授業やガイダンスがあって、教育システムが確立しているし、告発のための窓口も整備されている。そのための専門官もいる。
- 韓国では数年前に起きたヒトES細胞に関する大スキャンダルの後、若手からインターネットを介して大きな議論が湧き上がり、多くの大学で教育が実施されている。
- 研究不正は科学における犯罪であり、その行為を見逃さないという教育の方が不正をしないという教育よりも効果があるのではないか。
- 研究不正を防ぐためには、精神論よりも技術論を具体的な材料の下に勉強し、知識を蓄えるということが非常に大事。
- 生データをできるだけ仲間内あるいはボスとの間で相互に解釈し合うというラボ文化をしっかりと熟成することが、一番の原点ではないか。
- データやノートの管理も大切。「電子データだったのになくなってしまった」という言い訳を許さないためにも、データ管理については十分な配慮と責任を。

【第三部：中堅・シニアパネルディスカッション】

中堅・シニアパネルディスカッションでは、村松正實氏（埼玉医科大学）、田中啓二氏（東京都臨床医学総合研究所）、夏目徹氏（産業技術総合研究所）、後藤由季子氏（東京大学）、山中伸弥氏（京都大学）、中山敬一（九州大学）の6名のPIに登壇していただき、若手パネルを受けて研究倫理に対する若手教育のあり方等について議論を行った。以下に主要な話題・意見を抜粋する。

- ポジティブな教育論とネガティブな罰則論の両論があり、どちらの方法論がより有効かは悩むところである。
- PIとしては、とにかく真実が知りたい、コントロールをしっかりと実をすれば、望むような結果が出なくても良い、ということを常に学生には伝えている。
- 全ての生データに目を通すことは現実的には無理。相互のフィードバックチェック機構が働くシステムを実現していきたい。
- 捏造は4つのパターンに分類される：ボトムアップ出来心型、ボトムアップ確信犯型、トップダウン恫喝型、トップダウン洗脳型…（筆者註：自称捏造評論家である夏目徹氏によるここのくだりはとても面白く、会場は大爆笑だったのだが、筆者の筆力ではとてもその雰囲気を伝えられそうにない。文章として読み返してみると、面白いだけでなく、非常に緻密な分析に基づいて話されていることがわかる。是非ともHP上で公開されている全文でお読みいただきたい。）
- ボトムアップ型にしても、本来PIがしっかりしていれば未然に防げるはず。
- 研究室の透明性を上げていくことが重要。
- 生命科学にはまだ曖昧が多く、真実の帰結がどの段階でどうなされるのかと言うことに難しさがある。
- 自分たちで不正の予防や治療法について検証するということが非常に大事な原点。
- こういう会が持たれることをきっかけにして、継続的にされていくことによって、この研究倫理の重要性の

啓蒙というのを若い世代につなげていくことがすごく大事である。

- 教育っていうのは、やはり科学を愛すること。我々が築き、先輩が築いてきたこの科学を一步進めるためには、うそを言うてはいけない。そういう誠実さを持って頑張る必要がある。
- 万一、ラボ内で科学不正が起こってしまったら、PIは責任を取って辞めるべきか？
- 辞める必要はないが、一刻も早く公表して説明責任を果たし、被害を最小限に食い止めるべき。
- どうあろうと、やはり最後はコレスポンディングオーナーの責任なのではないか。自発的にやったらもちろん辞めるべきだろうが、下の人がやったことを見抜けなかったときにも、恥を忍んで説明責任は果たす必要がある。
- 重大な実験結果が出たときは、必ず違う人に異なった

方法論で行って確認してもらう。

- 科学は真摯にやるし、愛情を持ってやることも大事だけど、一方で間違えることがあっても、それはしょうがない。だけど捏造とは全然性質が違う。
- 研究室の中で、ボスも含めて自由に話すことができ、データについてオープンに話し合える環境の整備が一番重要で、それがあれば大部分の捏造というのは防げるのではないか。
- 予定調和的な捏造よりも、全く予期しないデータを慎重に検討することの方が大発見につながる。
- 具体的なものと総論的なものを組み合わせて、学生に対して講義できるような資料、参考書になるようなものを作成すれば、それが各機関での学生の教育に利用できる。そのような具体的なプランが今後必要であろう。

II. アンケート結果

(アンケート回収数：195 名)

問 1 あなたの年齢は？

① 24 歳以下	11%
② 25 ～ 30 歳	27%
③ 30 ～ 34 歳	15%
④ 35 ～ 39 歳	12%
⑤ 40 ～ 49 歳	24%
⑥ 50 ～ 59 歳	7%
⑦ 60 歳以上	3%
⑧ 未記入	1%

問 2 あなたの性別は？

① 男性	70%
② 女性	30%

問 3 あなたの現在の所属機関は？

① 国公立大学	58%
② 私立大学	14%
③ 官庁系研究所・病院	15%
④ 企業	9%
⑤ その他	4%

問 4 あなたの現在の身分・職階は？

① 学部学生	4%
② 大学院生 (修士)	10%
③ 大学院生 (博士)	15%
④ ポスドク	14%
⑤ 大学教員 (助教・講師・准教授)	27%
⑥ 大学教員 (教授)	9%
⑦ 研究員	9%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	6%
⑨ その他	6%

問 5 あなたは PI (Principle Investigator：ラボの主宰者) ですか？

① はい	16%
② いいえ	74%
③ 場合による	9%
④ わからない・未記入	1%

問6 このシンポジウムを何で知りましたか？（複数回答）

① 学会ホームページ	27%
② ポスター	9%
③ 学会会報	28%
④ 会場内の広告	5%
⑤ 蛋白質核酸酵素	3%
⑥ 他人に聞いた	19%
⑦ その他	9%

問7 蛋白質核酸酵素 12月号「正しい知識が捏造を防ぐ：データを正確に解釈するポイント」第1回「Photoshopによるゲル画像の調整」をご覧になりましたか？

① 読んだ	18%
② 内容をちらっと見た	14%
③ タイトルを見たが読んでいない	11%
④ 知らなかった	57%

問8 このシンポジウムの感想をお教え下さい。

① とても面白かった	40%
② まあまあ面白かった	43%
③ 普通	7%
④ あまり面白くなかった	3%
⑤ つまらなかった	1%
⑥ その他・未記入	6%

問9 このシンポジウムで最も面白かった項目を挙げて下さい。（複数回答）

① 第一部（講演）	10%
② 第二部（若手パネル）	20%
③ 第三部（シニア・中堅パネル）	55%
④ 未記入	15%

問10 このシンポジウム時間の長さはどうでしたか？

① 長すぎる	22%
② 適当	62%
③ 短すぎる	10%
④ 未記入	6%

問11 今後このような試みを続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	65%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	24%
③ 止めた方がよい	0%
④ わからない・未記入	11%

問12 ご意見・ご感想・今後取り上げて欲しいテーマなど（一部抜粋）

【今後取り上げて欲しいテーマ】

- ・具体的な研究不正の例やその見抜き方
- ・研究者として格好のいいことを目指す心の指導
- ・杉野元阪大教授の事件を用いて、ケーススタディの講義資料として公開
- ・データの整理法や実験ノートの管理方法などの具体例
- ・PIが生データをどのように管理しているのか
- ・レビューアーとして注意すべきポイント

【ご意見など】

（将来に方策に関するもの）

- ・ケーススタディを示して欲しい
- ・精神論に陥らないことが重要
- ・パネリストに対してはテーマをはっきりと明示した方がよい
- ・不正の背景を是正するための具体的、技術的方策に向けた研究会を学会として立ち上げて欲しい
- ・教育が必要だ、ではなくリーフレットを作ろうなど、もっと具体的な解決策まで進めていく方がよい
- ・パネルディスカッションが適当かわからないが、ケーススタディ、報告書、啓発等は必須
- ・結論としてはどうしていくのか具体的な指針が気になる
- ・技術論や倫理教育などトピックスを絞って議論した方がよい
- ・ネットを利用してシンポジウム前後に調査や疑問を提起したらどうか
- ・教育の問題は研究環境やラボの雰囲気、スタッフとのコミュニケーション回数に依存すると思うが、皆が情報共有できるような環境を形成する努力が必要

- ・議論をまとめたものの公表を随時行い、より詳細な事例にも及ぶマニュアル的なものの作成につながっていけば非常に良い
- ・結論が「科学を愛する」で済ませてはいけない
- ・文科省のガイドライン以上のものをつくることには大賛成
- ・このような話し合いを各研究室の大きなミーティングで取り上げるなど話し合いの場を設けるのが良い
- ・漠然とした研究者の誇りより生データとしての白黒を評価するシステム作り、透明なラボ環境に対してのスタッフの流動性は具体的で共感した

(教育対象に関するもの)

- ・若手のみで本音で話せる会が大事
- ・折角なのでもっと若手や学生を集めた方が良いと思った
- ・正常か正常でないかの判断はPIがつけると思うが、それがPIにとって都合が良いか良くないかとならないよう、PIにしっかりしてもらうことが大事ということに帰結するのではない

(原因論に関するもの)

- ・Nature、Cell、Scienceの評価ばかりが高くなりすぎる傾向にある
- ・科学者としてのプライドがあれば不正は起きるはずがない
- ・捏造はボスの様々なパワハラによるものが多い

(開催する時間帯などに関するもの)

- ・開始時間を早くして欲しい
- ・ポスター発表と時間が被っているのが残念
- ・もっと多くの人が参加できる時間に行うべき
- ・設定時間より延長したのが残念だった
- ・予定時間どおりに進行していない

(その他：ポジティブな感想)

- ・充実していた
- ・考える良い機会になった
- ・この問題を多面的に理解することができた
- ・個々人が感じている問題点をこのような場で共有することは重要
- ・方法はともかくとしてこのような考える機会を持つことが大切
- ・先生方の研究に対する思いが嬉しく、自分も間違いのない結果を伝えていけたら良いと思った
- ・問題点を把握、共有して定義や型作りにつながるディスカッションで良かった

(その他：ネガティブな感想)

- ・少し長かったが内容的には消化不良の感が強い
- ・不正をなくすためには具体的にどうしたら良いのかわからなかった
- ・今回は議論を盛り込みすぎだった

(新聞記者からの意見)

- ・各研究者の日頃の苦勞が忍ばれる内容だった
- ・捏造がありましたら我々も追及に加わります、不正回避の防止の一助になりますかどうか

III. アンケート結果に対する分析

- 1) 今回のシンポジウムの参加者は約 250 名（昨年は約 300 名）で、予定していた人数（350 名）を 100 名ほど下回った。会場は 400 名を収容できる会場を借りていたので、前方に若干の空席が目立った。昨年より人数が減少した理由として、第二回目なので「目新しさ」が減じたこと、開催時間が遅くポスター発表時間とダブってしまったこと、周知方法の工夫が今一つだったこと、等が挙げられる。われわれの活動の一つに周知啓発があり、若手に興味を持たれてナンボという面があるので、次回開催には、上記の問題点を解決し、斬新なアイデアで、より多くの参加を目指したい。
- 2) 参加者年齢は 30 歳以下が 38%、30 歳代が 27%、40 歳代が 24%、それ以上が 10%と、広い年代にわたっ

て参加が認められた。これは、ほぼ昨年のシンポジウムと同じ傾向である。この科学的不正問題が「教育される」側だけの問題ではなく、「教育する」側にとっても非常に深刻な問題であるという受け止め方をされていることを示すものであると考えられる。

- 3) 身分・職階については、大学院生（修士・博士）が 25%、ポスドク・研究員 23%、助教・准教授クラス 27%、教授・主任研究者クラス 15%の内訳であった。これを PI・non-PI で分けると、PI：non-PI = 2：8 程度であり、幅広い参加が認められた。これも昨年のシンポジウムと類似した傾向であった。本シンポジウムの目標の一つには PI の教育も含まれているため、この程度の割合は妥当なものだと思われる。
- 4) このワーキンググループ活動の目的の一つが啓発活動にあることを考えると、催事の周知方法は非常に重

要な項目である。今回の参加者の約半数は、学会ホームページか会報によってこのシンポジウムが存在を知っており、ホームページと会報の利用が非常に効果的であることが判明した。それに対して全国に配布したポスターの効果は9%、直前に掲載された蛋白質核酸酵素の記事によって知った人は3%であり、意外に少なかった。

- 5) このシンポジウムに人を集める手段として期待していた蛋白質核酸酵素 12月号記事「正しい知識が捏造を防ぐ：データを正確に解釈するポイント」第1回「Photoshopによるゲル画像の調整」については、約3割の参加者しか読んでいないことがわかった。しかしシンポジウム会場で記事のPNEの別刷りを配ったことや、具体的な指針を求める声が高いことを考えると、今後の連載については認知度が上昇することが期待される。
- 6) シンポジウムに対する感想では、「とても面白かった」「まあまあ面白かった」が83%を占めた（去年は85%）。二年連続で80%を超える方に面白かったという印象を持ってもらったことは、啓発活動として一応の成功と言うことができよう。
- 7) シンポジウムの開催時間については、前回大変苦慮した点であり、その反省を踏まえて今回はなるべく早くから年会執行部との交渉を行った。しかし、それでも理想的な時間枠を確保することができず、昨年同様にシンポジウム前半がポスターセッションとかぶってしまい、参加者の声からは、前半を聞き逃し残念だった旨の意見が多く寄せられた。これは年会のプログラム編成が主に年会主導で行われており、学会本部が関与する余地がほとんどないことがその主因であると思われる。学会として特に重要な取り組みに関しては、2時間程度の枠を特別に用意する配慮が欲しい。今後、本ワーキンググループより理事会へお願いしていきたい。
- 8) シンポジウムの終了は公式には19時30分としたが、去年の経験を踏まえると議論が白熱した場合には、この時間では終わらないことは事前に予想していた。しかし折角の機会であるから、30分くらいの延長は仕方ないという方針の下で、予め軽食の準備を行った次第である。時間通りに終わらなかった点について、いくつか批判的なご意見をいただいたが、この場をお借りして深謝したい。しかし、漫然と進行した結果ではなく、初めから信念を持って確信犯に行った結果なので、どうかご理解を賜りたい。来年からは初めから2時間枠としてシンポジウムの設定を行いたい。
- 9) このような取り組みを続けるべきかどうかという問いについては、「是非続けるべき」65%（去年は80%）、「続けるべきだが方法を変えた方がよい」24%

（去年は11%）、と「続けるべきである」とする意見が89%（去年は91%）に達した。全体として続けていくべきという意見は変わらないが、方法を変えた方がよいという意見が倍増したことは、やはり二年目として見新しさが減ったことを反映していると思われる。次回はより効果的で斬新な企画を考えていきたい。ともあれ、9割近い学会員がこのような取り組みを支持していることを根拠に学会・年会執行部に対してより一層の支援をお願いしていくつもりである。

IV. 科学的不正防止に関する今後の若手教育のあり方について

前回と今回のシンポジウムでは多くの議論が百出したが、科学とは何かという総論的・抽象的な問題から、個々の事例という各論的・具体的な問題まで、幅広いスペクトラムの中で議論が交錯している感があった。もちろん議論が盛り上がるのは良いことであり、本シンポジウムのねらいの一つである「啓発活動」という目的にも合う。しかし、啓発活動だけでは効果は限定的なのは言うまでもない。このような本質的な問題に対して、世上しばしば見られるのは、議論だけが盛り上がって具体的な対策がない、という悪弊である。参加者の意見でも、具体的な方針を問う声がかかなり多かった。本ワーキンググループでは、本質的な議論をしながらも、常に具体的な視点を見失わないように心がけており、その一環として、具体的な技術論を述べながら、日常的なミスを減らしていくことで最終的に研究不正の防止に役立てようと、PNE誌上で『正しい知識が捏造を防ぐ — データを正確に解釈するための6つのポイント』というシリーズの連載を開始した。超多忙な第一線の研究者に執筆をお引き受けいただいたことは、本当に申し訳なく感じているが、これが将来の分子生物学会をはじめとする日本の科学界への大きな貢献になると信じている。連載が完了した暁には、これらをまとめた資料を作成し、どこの機関でも利用できる「若手教育のバイブル」を作り上げたいと願っている。本ワーキンググループの活動に関する会員諸氏のご理解とご協力を切にお願いする次第である。

なお、本シンポジウム開催にあたり、全面的にご支援下さった長田重一第31回年会長、いつもわれわれの活動に対して適切で親身なご助言を下さる柳田充弘研究倫理委員長および同委員の皆様に感謝申し上げます。また福田博氏・並木孝憲氏をはじめとする学会事務局の方や清水章弘氏・峰崎愛氏をはじめとするBMB2008事務局の方には格別のご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

男女共同参画委員会活動報告

1. 委員会構成 (2008 年 10 月～)

委員長：杉本亜砂子（理研 CDB）

副委員長：篠原彰（阪大）

アドバイザー：大坪久子（東大）

委員：井関祥子（医科歯科大）、漆原秀子（筑波大）
大杉美穂（東大）、大隅典子（東北大）、金井
正美（杏林大）、田畑哲之（かずさ DNA 研）
福田公子（首都大学東京）、本間美和子（福
島県医大）、松尾勲（大阪母子保健）、松崎文
雄（理研 CDB）

2. 男女共同参画委員会開催報告

昨年 10 月に新しく第 16 期男女共同参画委員会（上記委員による）が構成され、BMB2008 開催中に新旧委員による合同委員会が開かれました。委員会では、各ワーキンググループ（「年会企画」、「大規模アンケート分析」、「学協会連絡会」、「女子中高生夏の学校」）の座長より、9 月までの活動報告と今後の予定や課題について説明があり、その内容を踏まえて、今期の委員会活動について検討しました。本委員会では、今後も男女を問わず、能力を生かすことのできる多様性を学会の中に実現することをめざして、委員会活動を進めて行く予定です。

3. BMB2008 男女共同参画企画ランチョンワークショップの報告

神戸にて開催された BMB2008 において、2 学会合同で「進化していく男女共同参画」をテーマとしたランチョンワークショップ、ならびにポスター展示（文科省・女性研究者支援モデル事業採択機関を含む 41 機関）を行いました。ワークショップ趣旨としては、「施策と支援の現実および効果」を取り上げ、施策側ならびに支援を受ける側の双方からスピーカーをお招き致しました。会場にはほぼ満員の 280 名程の参加があり、質問や意見が活発に出て盛況のうちに終了しました。昨年に引き続き、ポスドクや大学院生を中心に、男性の参加者も多く見られ、男女共同参画に関する意識の高さが感じられました。

来年の年会企画は、会場で協力いただいたアンケート結果も参考に、より充実した議論の出来る開催のあり方を検討していく予定です。このたびのランチョンワークショップ開催にあたり、ご協力いただいた方々に心よりお礼を申し上げます。

4. 大規模アンケート報告書の進捗状況

2007 年 8 月～11 月に男女共同参画学協会連絡会によって「第 2 回科学技術系専門職の男女共同参画実態

男女共同参画委員長 杉本亜砂子・副委員長 篠原 彰

調査」(大規模アンケート)が実施されました。本学会会員 2,768 名による回答結果を、本委員会のアンケート WG が中心となり、分析を行っていましたが、最終的な分析結果としてまとめました。現在、分析結果を踏まえた提言作業及び報告書の作成を進めているところです。この報告書は、学会 HP などでも広く公開することを予定しています。

5. 学協会連絡会関連活動報告

i) 第 6 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムの報告書完成

2008 年 10 月 7 日、京都大学百周年時計台記念館にて開催された第 6 回学協会連絡会シンポジウムの報告書「科学・技術の成熟と新たな創造をめざして—第二回連絡会アンケート調査報告から学ぶもの—」が完成し、学協会連絡会 HP (<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/symposium1.html>) に掲載されました。

ii) 第 7 期男女共同参画学協会連絡会

第 7 期の学協会連絡会が、電子情報通信学会を幹事学会として始まりました。今期の委員長は広崎膨太郎氏（NEC）です。

6. 学会・年会における女性比率

会員女性比率 (2009 年 1 月 20 日現在)

会員全体⇒ 24.11% (3,688 / 15,298)

一般会員⇒ 20.07% (2,013 / 10,028)

学生会員⇒ 31.78% (1,675 / 5,270)

(参考) BMB2008 シンポジウムにおける女性比率 *

シンポジウムオーガナイザー ⇒ 3.5% (7 / 200)

シンポジウムスピーカー ⇒ 9.7% (64 / 660)

(* 日本分子生物学会員、日本生化学会員の合計)

シンポジウムオーガナイザー・スピーカーの女性比率は、年会における女性会員アクティビティの目安として今回はじめて調査を行いました。上記のように、学会会員の女性比率と BMB2008 シンポジウムにおける女性比率の間には大きな開きがあり、年会における女性会員の活躍度は相対的に低いことがわかりました。男女共同参画委員会では、年会における各発表カテゴリーの男女比を経年的に調査・公表することを計画しています。

次回年会では、女性会員のこれまで以上に活発な参加・演題発表を期待しています。

特定非営利活動法人日本分子生物学会 第15期・第16期合同理事会記録

日 時：2008年9月27日(土) 15:00～18:50

場 所：パレスビル3階会議室 3-E号室

出席者：第16期

饗場弘二、荒木弘之、上村 匡[○] (15期編集幹事兼)、大隅良典[○]、岡田清孝[○] (15期副理事長兼)、片山 勉、小安重夫、塩見春彦、篠原 彰、白髭克彦、杉本亜砂子、辻本賀英、永田恭介 (15期庶務幹事兼)、長田重一[○] (15期理事長/2008年会長兼)、鍋島陽一 (15期監事兼)、升方久夫、町田泰則[○]、山本正幸[○]

第15期

小原雄治 (2009年会長兼)、田中啓二、月田早智子、中山敬一、花岡文雄、宮園浩平 (副理事長/会計幹事兼)、大石道夫 (監事) 以上25名 (○印は第15期より)

欠席者：第16期

相沢慎一、審良静男、貝淵弘三、影山龍一郎、加藤茂明[○] (15期広報幹事兼)、篠崎一雄[○]、田畑哲之[○]、正井久雄、水島 昇、柳田充弘 (Genes to Cells 編集長/15期研究倫理委員長兼)、山中伸弥[○]、渡邊嘉典

第15期

阿形清和、石川冬木、大隅典子、岡野栄之、勝木元也、郷 通子、後藤由季子、榊 佳之、竹市雅俊、中西重忠、西田栄介、本庶 佑、水野 猛、山本 雅、山梨裕司 (集会幹事)、米田悦啓 (集会幹事)、谷口維紹 (2010年会長)、釣本敏樹 (論文調査WG委員長) 以上30名

事務局：福田 博 (記録)、並木孝憲

関係議題参加者：峰崎 愛 (BMB2008事務局より)

本理事会成立について：

永田庶務幹事より、理事25名、監事1名が出席し、委任状(理事)11名を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

長田理事長より、議事録署名人として、荒木理事と永田理事が指名され、承認された。本会合は第16期第1回理事会を兼ねた15期・16期合同理事会であるので、議事に先立ち、自己紹介が行われた。

議 事：

1. 報告事項

- 1) 長田理事長より第15期の活動全般(事業概要)が報告された。

・学会の法人化

2007年6月19日、法人所轄庁である東京都より特定非営利活動法人の認証決定を受け、設立登記が完了した。本学会は、同6月19日をもって法人設立となった。

- ・2007年4月23日～24日、第7回春季シンポジウム『Biology-Old Codes and New Molecules』(世話人：塩見春彦教授)が開催された。

会場：兵庫県立淡路夢舞台国際会議場

参加者数：146名(国内141、海外5)

シンポジウム前日に市民公開講座『プラナリアの再生のメカニズム』を開催。

- ・2008年5月26日～27日、第8回春季シンポジウム『躍動する分子生物学—北の大地から』(世話人：畠山昌則教授)が開催された。

会場：京王プラザホテル札幌

参加者数：616名、招待講演者18名

シンポジウム前日に市民公開講座『健康な体を維持する仕組み』、『ゲノムが教えてくれる生物のすがた』を開催。

- ・2007年の年会は、第30回日本分子生物学会年会・第80回日本生化学会大会 合同大会の形式で、山本 雅年会長により、2007年12月11日～15日の5日間、パシフィコ横浜において開催された。参加者数は11757名、一般演題は5581題であった。

- ・2007年11月、学会ホームページを全面リニューアルした。

- ・14期に引き続き15期においても、積極的に男女共同参画事業をサポートした。

2) 学会創立30周年記念座談会報告

- ・本年3月に執行部にて、会報11月号に創立30周年の特集記事を組むことを企画した旨、長田理事長より説明があった。持ちまわりメール審議にて理事会の賛同を得て「学会創立30周年・会報特集記事/企画委員」を組織した。メンバーは、理事長、岡田副理事長、宮園副理事長、永田庶務幹事、加藤広報幹事の5名とした。学会設立から創立初期において、学会長・年会長を務められた先生方に、創立から黎明期に至る学会の歴史・エピソード・当時の研究環境、等々について、自由に執筆依頼し、8月末までにすでに次の通りの原稿を入稿頂いている。

【タイトルと執筆者】

○日本分子生物学会事始(岡田吉美氏)

○分子生物学会の先史時代(関口睦夫氏)

- 研究活動の活性化と社会貢献（三浦謹一郎氏）
- 学会が設立された頃の思い出（高浪 満氏）
- 私と学会（吉川 寛氏）
- 日本分子生物学会創立 30 周年に寄せて（大石道夫氏）

- ・さらに執行部では、記念座談会『日本分子生物学会 30 年の歩み』を企画し、本年 6 月 28 日(土)に東京で開催した。この座談会は大石道夫監事（第 10 期会長）に世話人をお願いし、研究分野や当時の状況を踏まえて、その参加メンバーも大石監事に決定頂いた。実施概要は次の通りであった。

日 時：2008 年 6 月 28 日(土) 15：00～17：30

開催場所：ホテルグランドパレス

司 会：大石道夫（第 16 回年会長、第 10 期会長）

参加者：岡田吉美（第 1 回年会長）

関口睦夫（第 2 回年会長、第 6 期会長）

村松正實（第 5 回年会長）

松原謙一（第 7 回年会長、第 9 期会長）

三浦謹一郎（第 11 回年会長、第 7 期会長）

第 15 期執行部出席者：長田重一（第 15 期理事長）

加藤茂明（第 15 期広報幹事）

永田恭介（第 15 期庶務幹事）

- ・座談会の記録原稿は、事務局・福田氏がまとめ、A 4 判・約 25 ページとなった。参加者の校閲を終え、すでに印刷所に入稿、編集作業に入っている。前述 6 名の先生からの寄稿と座談会原稿を合わせて、まとまったボリュームとなったので、通常号からは独立させ、会報 91 号（2008.11 月号）の増刊号（創立 30 周年記念特集号）として発行することとなった。11 月初めには、年会プログラムと会報 91 号（通常号）、91 号記念特集号を 3 冊同封して、会員へ発送する予定である。

- 3) 宮園会計幹事より 2008 年度（平成 20 年度）会計の収支見込みについて説明がなされた。昨年 6 月の法人移行により事業年度（会計年度）が 4 月～3 月から 10 月～9 月に変更となり、今回の 2008 年度決算が初めての 12 カ月の法人決算となる。ただし 9 月末の正式な決算資料がすべて集まるのは 10 月半ばとなるので、現時点における最新の数字にて見込み決算資料を作成した。

2008 年度決算より、年会の会計（昨年の BMB2007 決算の分子生物学会・収支負担分）が正式に学会本体会計にすべて繰り入れられる。その本体会計への収支繰入部分につき詳細説明がなされた。

本年度、会費納入率はかなり改善し、ほぼ従来のレベルに戻ったが、今後は学生会費の納入率アップを事務局は努力されたい。入会金は約 175 万円であ

り、新入会者は 1750 名といったことになるが、ほぼ同数の長期滞納による除籍者と通常退会者がいるので、会員数としては横ばいである。春季シンポジウムについては、収入 48 万円に対し、支出 566 万円で 518 万円の持ち出しではあるが、従来も年会で剰余金を捻出して、会計全体の中で春季シンポジウムに充ててきたので、ほぼ想定内の収支状況である。

Genes to Cells については、昨年 7 月、京大構内の外に独立した編集室事務所を開設したが、編集経費は非常に節約されており、さらに、柳田編集長、上村編集幹事の努力により、出版社との契約改定が進んでおり、新年度からは編集経費（発行支援金）のうち 800 万円は出版社負担分として精算返金されるようになる（学会本部会計として通常の支払い業務を行い、半期に 1 度、出版社からの精算入金分を立替経費として経理処理する）。2008 年度収支見込みでは、1～6 月分につき出版社負担分の精算がなされ、発行支援金支出は 300 万円前後となる見通しである。

その他、管理費の各科目についての説明がなされた。論文調査 WG の旅費・会議費や、論文調査報告書と GTC 出版契約書に関する弁護士費用（相談と書類確認）は予備費より支出した。

なお、本収支の税務処理であるが、本学会は会計事務所と顧問契約を交わしており、その委嘱範囲に税務顧問も含まれているので、専門家の指示のもと対応する予定である旨報告された。

4) 理事選挙結果報告

- ・永田庶務幹事（第 16 期理事選挙管理委員長）より理事選挙結果の報告が行われ、すでに当選者 30 名より承諾書を受領しており、第 16 期理事が確定したとの説明がなされた。

【第 16 期選挙結果】

選挙公示日：2008 年 6 月 18 日(水)（会報 90 号発送）

投票期間：2008 年 6 月 20 日(金) 9：30

～7 月 11 日(金) 18：00

開票日：2008 年 7 月 17 日(木)

開票場所：学会事務所

開票立会人：選挙管理委員 3 名

（永田恭介、多羽田哲也、宮澤恵二）

有権者数：14298 名

投票者数：281 名

有効投票数：2810 票

（被選挙権者への投票 2095 票、白票 715 票）

無効投票数：0 票

当選者：(50 音順) 相沢慎一、饗場弘二、審良 静男、荒木弘之、上村 匡、大隅良典、岡田清孝、貝淵弘三、影山龍一郎、片

山 勉、加藤茂明、小安重夫、塩見春彦、
篠崎一雄、篠原 彰、白髭克彦、杉本
亜砂子、田畑哲之、辻本賀英、永田恭介、
長田重一、鍋島陽一、正井久雄、升方
久夫、町田泰則、水島 昇、柳田充弘、
山中伸弥、山本正幸、渡邊嘉典

以上 30 名

電子投票に切り替わったこともあり、前回より投票率が下がったことが永田庶務幹事より報告された。Web 会員システムの選挙ページ内に、電子投票に必要な会員番号の付してある“理事候補者参考リスト”が公開されていたが、その掲載場所がわかりにくかったとの意見が、出席理事より提出された。次の選挙実施には、掲載資料の見せ方に改善を行い、また投票率を高めるために、投票期間中にも一斉メール配信を行ったほうがよいとの意見が提出された。2 年後の選挙管理委員会には、事務局から申し送ることが確認された。

- 引き続き、永田庶務幹事より、選挙管理委員会を運営するに当たり、従来、準拠すべき選挙管理委員会内規が整備されていなかった点につき説明が行われた。特に配慮・検討すべき点は、得票数 30 位の者の取り扱いである。第 16 期選挙では、従来の慣習を継続し 30 位が得票同数の場合は年長者順に当選者とした（毎回の選挙で、30 位に得票同数者が複数名いることが事務局より説明された）。30 位が同数の場合に、当選者を年長者とするか年少者とするかを検討した結果、「30 位が得票同数の場合は、選挙管理委員会において厳正に抽選を行い、当選者を決定する。」ことに決定した。

上記内容を盛り込み、本理事会において以下の通りの選挙管理委員会内規を定めた。

「理事選挙に関する選挙管理委員会内規」

【選挙管理委員の指名、ならびに選挙管理委員会の担当業務について】

1. 細則第 2 条により理事長より委嘱された選挙管理委員 3 名は、次期理事選出のための選挙業務を行う。理事長の指名により、委員 3 名のうち 1 名を選挙管理委員長とする。選挙実施時において理事・監事に就任している者は、選挙管理委員には就任できない。理事でない幹事については、選挙管理委員への就任を妨げないものとする。選挙管理委員の連続した再任は避けるものとする。
2. 選挙管理委員長は、理事長、庶務幹事、学会事務局長と選挙事務内容を確認し、理事選挙全般に関する選挙日程を作成する。
3. 選挙管理委員会は、選挙実施前に、会報ならびにホームページを通じて、会員あてに選挙公報を行うものと

する。

【選挙要項、ならびに当選者確定までの諸手続きについて】

1. 会則第 14 条により、選挙権は正会員、名誉会員、学生会員がそれを有し、被選挙権は正会員のみが有しているが、選挙権者、被選挙権者となれる入会期限については、選挙実施年度の選挙日程を考慮し、選挙実務に支障のないように、選挙管理委員会が決定する。
2. 当面の間、投票は学会ホームページの「会員管理システム」上における電子投票システムにおいて行われるものとする。
3. 選挙権者は、投票期間中、選挙システムへログインし、被選挙権者の中から 10 名以内を選んで投票を行う。
4. 理事会の責任のもとに、新理事候補者参考リストが作成されるが、理事候補者リストはあくまでも選挙権者の投票のための参考資料であり、参考リスト以外の被選挙権者への投票を何等妨げるものではない。
5. 選挙管理委員は、開票（電子投票システム集計）に立会い、得票数の多い順に 30 名を当選者とする。30 位が得票同数の場合は、選挙管理委員会において厳正に抽選を行い、当選者を決定する。
6. 選挙管理委員会は、当選者と次点者（5 名以上）の個別投票数に関して理事長にのみ報告を行い、その他のすべての会員に対して、投票内容の守秘義務を有するものとする。
7. 開票結果が出た後すみやかに、選挙管理委員長は理事長との連名による「当選通知」を発行し、事務局は「理事就任承諾書」を集めるものとする。
8. 当選者の中から、万一、辞退者が出た場合は、選挙管理委員長は理事長と協議を行い、次点者を繰上げ当選とするか否かは、理事長の指示によるものとする。（法人定款上（第 13 条）の役員定数は、理事 25 人以上 35 人以内となっており、繰上げ当選者を出さなくても運用上の支障はない。）
9. 選挙結果（投票期間、開票日、開票場所、開票立会人、有権者数、投票者数、有効投票数、無効投票数、当選者氏名）は、会報ならびにホームページを通じて、告知される。

2008 年 9 月 27 日、第 15 期第 16 期合同理事会において、上記を日本分子生物学会・理事選挙管理委員会内規と定める。

- 5) 永田庶務幹事（石川賞推薦委員長代理）より、2008 年 1 月～9 月に学会推薦を行った各種学術賞について報告がなされた。引き続き、花岡研究助成選考委員長より 2008 年に推薦した研究助成について報告が行われた。

- 6) 長田理事長（石川賞推薦委員長代理）より、第6回日本分子生物学会三菱化学奨励賞候補として11件の応募があり、選考の結果、以下の受賞者2名が決定されたとの報告がなされた。

○鈴木 勉（東京大学大学院工学系研究科 教授）

【研究題目】

（和文）RNA 修飾の生合成と機能に関する研究

（英文）Biogenesis and functions of RNA modifications

○富田耕造（産業技術総合研究所 研究グループ長）

【研究題目】

（和文）鋳型非依存的 RNA 合成酵素の進化・分子機構に関する研究

（英文）Mechanism and evolution of template-independent RNA polymerases

授賞式および受賞講演は、BMB2008 開催2日目、2008年12月10日(水)17:30より行われる。

なお、出席理事より今回の応募11件の研究分野につき質問が出され、月田理事（賞選考委員）より、今年も幅広い研究分野からの推薦、応募があったことが報告された。

- 7) 長田第31回年会長より、配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は5573演題、そのうち991演題が一般口頭発表に採択された。また、7月の演題投稿に間に合わなかった会員からの発表希望の問合せがあり、合同大会準備会議で検討した結果、本年会では「Late-Breaking Abstracts」を受け付けることとした（受付期間は2008.10.6～2008.11.14）。「Late-Breaking Abstracts」は、準備作業の都合もあり、プログラム集・要旨集には掲載されず、会場で配布される簡易印刷物の形で配布されることになる。

プログラム集は例年通り11月上旬の発送を予定している。今年は地球環境の保全（紙資源）に配慮し、両学会に重複している会員へのプログラム二重送付を避けるべく、生化学会にも属している会員には分子生物学会からのみのプログラム集送付となることが報告された。

要旨集については、年会当日の、参加者の荷物負担や地球資源保護を目的とし（例年、会場で処分される要旨集が相当部数、見受けられる。）、第31回年会では、事前参加登録者にのみ要旨集（印刷物）とCD-ROMを事前配布し、当日参加登録者にはCD-ROMのみを配布する旨説明がなされた。

懇親会については、シンポジウム・オーガナイザーを招待者とし、次世代を担う若い人たちに多数参加してほしいと長田年会長より説明があった。

- その他の配布資料、BMB2008 一般演題 / 発表者の所属学会データ

分子生物学会会員 3392 演題

生 化 学 会 会 員 1801 演題

画 学 会 会 員 380 演題

総 演 題 数 5573 演題

- 8) 小原第32回年会長より、開催企画案につき報告がなされた。

会期：2009年12月9日(水)～12日(土)の4日間

会場：パシフィコ横浜

組織委員会：年会長 小原 雄治

副年会長 荒木 弘之

幹 事 小林 武彦、深川 竜郎

アドバイザー 桂 勲

組織委員 遺伝研を中心に静岡県
の会員39名

○テーマ「分子生物学会年会の原点に戻る」

(1) “議論する場”に

- ①会場の利点を生かして“議論する場”となる年会にする

- ②一日1,000演題のポスターが一つの会場にまとまるという特性を活かし、ポスター会場での発表／討論を重視し充実させる。そのための様々な仕掛けを検討中。（座長／ディスカッサー配置による質疑・討論、そのためのポスター形式の統一など）

(2) 国際性を高める

- ①シンポジウムは要旨・講演ともに英語で統一し、若手PIを中心に、各シンポジウム外国人演者を2名程度招聘（そのための支援を検討中）。

- ②海外演者にも、ポスター討論など積極的な年会プログラムへの参加の仕組みを検討。

- ③ポスターを含め、要旨は基本的に英語での執筆を推奨する。

(3) 社会性の推進

(4) ITを積極活用する

- ①プログラム集は印刷物を作成・送付するが、要旨集はオンライン化し、印刷物を廃止したい。

- ②参加登録者はパスワード・IDを用いてWWW上での要旨等の前情報の閲覧・検索・ダウンロードを可能にする。

- ③年会会場にて、PC・携帯電話にて、検索・閲覧・その他のサービスを利用できるようにしたい。

- ④会期後の、要旨の一般公開（例えば一定期間後）を検討している。

上記企画案の(4)①②につき、小原年会長の説明に続き、荒木副年会長からも詳細説明がなされ、

その後、意見交換がなされた。討議の結果、本理事会において、講演要旨のオンライン公開が承認された。(4)④の年会終了後の要旨の一般公開については、データを設置する場所（検索機能を含め、システム上の検討課題を解決する）や、発表者の論文投稿、特許等についても関係してくるので、次回理事会にて、継続検討することとなった。

- 9) 長田理事長（谷口第33回年会会長代理）より第33回（2010年）年会につき報告がなされた。

名 称：第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 合同大会

略 称：BMB2010（Biochemistry and Molecular Biology 2010）

会 期：2010年12月7日(火)～10日(金)の4日間

会 場：神戸ポートアイランド

年会長：谷口維紹

第33回日本分子生物学会年会は、第83回日本生化学会大会（田中啓二会長）との合同大会として開催する。開催地が神戸、開催会期は4日間であるので、今年のBMB2008の開催実績をふまえ、会場使用形式等を踏襲しつつ、魅力ある合同大会となるように、今後、学術企画を検討していきたい。来年1～2月には、BMB2010第1回準備会議を開催し、組織委員会の準備にも入る予定である旨、谷口年会長に代わって長田理事長より報告された。

- 10) 上村編集幹事より『『Genes to Cells』編集報告、ならびに出版社契約につき、報告が行われた。

- 出版契約について

本学会機関誌『Genes to Cells』の出版元である Blackwell Publishing が John Wiley & Sons に吸収合併されたことに伴い、本誌における契約内容の抜本的な見直し、改定を進めてきた。これにより、機関誌発行の学会収支は大幅に改善される見込みであり、間もなく新契約の調印にいたる予定であるとの報告がなされた。

その概要としては、①編集事務局費用など、学会が負担してきた約800万円（2008年度の国際誌発行支援金は予算上1000万円を計上）につき、今後は800万円を上限に出版社が負担する。（注、オンライン費用は今後も別途、同額が必要である）②200万円の編集協力金制度を廃止し、学会と出版社とで利益（会員外の購読収入）を折半する。③編集事務局機能を段階的に出版社へ移管し、本誌のステータスをさらに向上させる。以上の3点である。

- 編集状況に関する詳細資料（①2008年9月10日現在のOnline投稿数一覧、②2003年9月～2008年9月の各年月別投稿数、③2003年9月～

2008年9月の国別 Accept & Reject 率一覧）が配布され、説明が行われた。2008年6月には、これまでの論文掲載者およびEditorへ再投稿の呼びかけメールを配信するなど、投稿数増加のための働きかけを行っている。『Genes to Cells』をさらなる国際ジャーナルに育てるため、理事各位にはご協力をお願いしたいとの説明がなされた。

- 11) 永田庶務幹事（大隅典子男女共同参画委員長代理）より、男女共同参画委員会活動報告の説明が行われた。報告内容は2点、①第2回大規模アンケート分析について、②女子中高生夏の学校2008～科学・技術者のたまごたちへ～、であった。また、本年のBMB2008にあたり、年会2日目の12月10日に開催されるランチョンワークショップ「進化していく男女共同参画」につき報告がなされた。

引き続き、男女共同参画委員長・大隅典子氏と男女共同参画学協会連絡会運営委員・大坪久子氏の連名で長田理事長あてに提出されている検討依頼文「分子生物学会における「個人情報保護方針」策定について」のお願い」の説明がなされた。

その依頼内容であるが、上述①第2回大規模アンケート分析（男女共同参画委員会内のアンケート分析WGが中心となり、大規模アンケートの中の分生会員分データのみを抽出し、バイオ系研究者が抱える問題点の分析を進めている）について関連して、学協会連絡会において提示される「データベース利用と管理ガイドライン」では、各学会独自の個人情報保護方針の策定を求められており、本会においても、早急に学会独自の個人情報保護方針を策定してほしいといった依頼であった。

分子生物学会は、従来、法律に準拠するといった原則で、学会の業務を行ってきたが、このたびの依頼内容をも網羅する形で、分子生物学会独自の個人情報保護方針を制定する方向で、理事長、庶務幹事、学会事務局にて、保護方針（案）を作成した。資料が配布され、「個人情報保護方針」が本理事会において制定された（2008.9.30 HPに掲載された）。

- 12) 中山若手教育問題ワーキンググループ座長より、同ワーキンググループ最終答申「科学的不正を防止するための若手教育への方策について」（2008年4月30日）が配布され、説明がなされた。同答申については、昨年12月の理事会で活発な討議が行われており、その後、ワーキンググループにてさらなる検討と修正が加えられた。本年4月26日、理事会執行部会議（長田理事長、宮園副理事長、中山理事、山本雅理事）にて最終確認作業が行われ、若手教育問題ワーキンググループの名前で答申を公開（情報発信）していくが決められた。本理事会にて同答申

を公開することが承認され、学会 HP と会報 11 月号へ掲載することとなった。

引き続き、第 31 回年会会期中（2008 年 12 月 9 日（火）18：00～19：30）に開催される第 2 回若手教育シンポジウム「今こそ示そう科学者の良心 2008－みんなで考える科学的不正問題－」につき報告された。第一部は講演、第二部は若手パネルディスカッション、第三部は中堅～シニアパネルディスカッションとし、共立出版㈱の協賛を得て、軽食・ジュースを提供する予定である。

また、若手教育ワーキンググループでは、「蛋白質 核酸 酵素」とのタイアップ企画を進めており、シリーズ：正しい知識が捏造を防ぐ「データを正確に解釈するための 6 つのポイント」を連載する予定である。2008 年 12 月号の「Photoshop によるゲル画像の調整」（中山敬一）第 1 回を皮切りに、2009 年 10 月号の第 6 回まで、ワーキンググループ委員の持ち回りでシリーズ執筆を行う予定であることが報告された。

なお、出席理事より、不正・捏造云々から始まるのではなく、「正しいサイエンスとは〇〇〇あるべきだ!」といったニュアンスで、教育・啓発活動が進められないものか、といった意見が提出された。PI 教育、ラボの運営、等々につき活発な意見交換がなされた。

13) 研究倫理委員会・論文調査ワーキンググループ「論文調査ワーキンググループ報告書」、ならびに「意見書（杉野元教授）」について

論文調査ワーキンググループ（WG 委員長：釣本敏樹九大教授）は、1 年半に亘って、杉野元阪大教授が関与した論文捏造問題に対し、中立的立場でその背景を調査し、分子生物学会としての同捏造問題に対する説明責任を果たすと共に、将来を担う研究者の研究発表における教訓を明示することを目的として調査活動を行ってきた。2007 年 4 月から 2008 年 7 月までに 8 回の会合を開催し、聞き取りおよび書面調査の対象は 20 名（内、4 名は外国人研究者）に及んだ。このたび、調査ワーキンググループから理事会への報告書提出といった運びとなった。

本理事会には、海外出張のため柳田研究倫理委員長の出席がかなわず、また釣本論文調査 WG 委員長も事情があり（怪我をされたため）上京できない事態となった。しかし調査委員を兼ねている片山理事、篠原理事が出席しているので、重要議題を審議してよい、との確認がなされ、その上で、「報告書」「意見書」が配布された。

「報告書」「意見書」とともに、長田理事長が全文を読み上げ、その後、質疑応答に入った。片山理事、

篠原理事からは、この 1 年半の調査活動についての詳細説明がなされた。花岡理事（論文調査 WG オブザーバー）からも補足説明が行われた。「報告書」「意見書」共に、弁護士の確認作業を経ており、その公開に際し、法的に問題のないことは確認されている旨、片山理事より説明がなされた。活発な意見討論の結果、「報告書」「意見書」とともに、学会 HP と会報（2008 年 11 月号）で公開していくことが、本理事会で承認された。

（報告書については、1 箇所につき微妙なニュアンスを修正した。また、報告書と意見書（反論レポート）の発行日が前後していることにつき出席理事より質問が出されたが、その後、弁護士に確認した結果、問題はなかった。最終的には、弁護士のアドバイスもあり、報告書公開を理事会で承認した 9 月 27 日を、報告書発行日とした。）

今後、論文調査ワーキンググループでは、報告書の英語版作成作業に着手し（英語版報告書も弁護士の確認を取る予定である）、Genes to Cells に“Letter to Editor”といった形で掲載できるように作業を進めていく旨、片山理事より説明がなされた。

14) その他

• 学会創立 30 周年記念出版の件

永田庶務幹事より、東京化学同人から提示されている企画案（Ⅰ．シリーズ分子細胞生物学…分子生物学の基礎的知識をまとめた入門シリーズ シリーズ構成は 7 つ、Ⅱ．分子細胞生物学 教科書…外国教科書を凌駕する標準教科書を分子生物学会の総力をあげて作る）につき、紹介、報告がなされた。討議の結果、本件については、第 16 期理事会に申し送ることとなった。たとえば、学術事業企画委員会（仮称）等を設置し、検討したらどうかとの意見もあり、継続審議事項となった。同出版社からは、学会会報への広告掲載希望も入っており、その検討も合わせて、16 期理事会に申し送られた。

• 生物科学学会連合より各加盟学会あてに、学会ホームページに、高校生向けの記事をぜひ掲載してほしい。との要望が出されている旨、永田庶務幹事より報告があった。

• 本会合は第 15 期最後の理事会でもあり、長田理事長より、理事・監事・幹事に対し、謝辞が述べられた。

2. 審議事項

1) 第 16 期理事長の選任

議事進行役である、第 15 期長田理事長、第 15 期永田庶務幹事、ともに第 16 期理事であるため、先ず、理事長選出に関する細則につき事務局より説明がな

され、その後、第16期理事による自由討論が行われた。意見交換の後、第16期理事の投票により（開票立会い：第15期大石監事）、第16期理事長として岡田清孝氏が選任された。

2) 第16期副理事長の件

細則第4条の確認がなされ、第16期岡田理事長より副理事長は2名設置したいとの要望が出された。なお、その選任については、年会前日（12月8日）の次回理事会で決定することとなった。

3) 第16期監事の選任、各幹事、各種委員会委員の選出・委嘱について

監事、各幹事の選出ならびに各種委員会については、慣例に従い、すみやかに新旧の理事長／庶務引継会を行い、その選出・委嘱に関しては、第16期岡田理事長に一任された。

4) 第16期の事業計画について

第16期岡田理事長に一任された。継続議案については、次回理事会にて検討する。

上記、第15期・第16期合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2008年9月27日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第15期・第16期合同理事会

議 長	長 田 重 一	㊞
議事録署名人	荒 木 弘 之	㊞
議事録署名人	永 田 恭 介	㊞

特定非営利活動法人日本分子生物学会 第16期第2回理事会記録

日 時：2008年12月8日(月) 15:00～18:30

場 所：神戸国際会議場 4階 403 会議室

出席者：岡田清孝（理事長）、相沢慎一、荒木弘之、上村 匡（編集幹事兼）、大隅良典、影山龍一郎、片山 勉、加藤茂明（広報幹事兼）、小安重夫、塩見春彦（会計幹事兼）、篠原 彰、白髭克彦、杉本亜砂子、田畑哲之、辻本賀英、永田恭介、長田重一（2008 年会長兼）、鍋島陽一、正井久雄、升方久夫、町田泰則、水島 昇、柳田充弘（Genes to Cells 編集長 / 研究倫理委員長兼）、山本正幸、渡邊嘉典、小川智子（監事）、吉川 寛（監事）、石野史敏（庶務幹事）、小林武彦（集会幹事）、小原雄治（2009 年会長）、中山建男（2009 春季シンポジウム世話人） 以上 31 名

欠席者：饗場弘二、審良静男、貝淵弘三、篠崎一雄、山中伸弥、宮園浩平（集会幹事）、谷口維紹（2010 年会長） 以上 7 名

事務局：福田 博（記録）、並木孝憲、丸田夏子

関係議題参加者：峰崎 愛（BMB2008 事務局より）

本理事会成立について：

石野史敏庶務幹事より、理事 25 名、監事 2 名（総会にて選任確認手続きを実施予定）、幹事 2 名、議題関係会員 2 名が出席し、委任状（理事）5 名を受理しており、本理事会は細則第 4 章第 8 条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

岡田清孝理事長より、議事録署名人として、田畑哲之理事と篠原彰理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 報告事項

1) 議事に先立ち、岡田理事長より第 16 期の監事就任をお願いした小川智子会員、吉川寛会員が紹介され、両監事より挨拶がなされた。引き続き、出席者全員による自己紹介が行われた。

2) 第 16 期理事会の役割分担（監事、各幹事、各種委員会）について

本理事会の役割分担、各種委員会が決定した旨、岡田理事長より報告がなされた（2008.12.18 付にて HP に掲載済み）。

3) 石野庶務幹事より、以下 4 点につき庶務報告が行われた。

- 2008 年 12 月 3 日現在の会員数は次のとおりである。

名誉会員 1 名

正 会 員 10019 名（海外在住含む）

学生会員 5245 名（海外在住含む）

賛助会員 35 社

合 計 15300 名（前年 12 月総会・対比 -667）

昨年同時期に比べ約 660 の減であるが、本年は 6 月の理事選挙の前にかかなり厳しく会費長期滞納者チェックを行い相当数の除籍退会手続きを行ったため、その影響もある。明日からの年会会期中に、相当数の入会者も予想されるので、会員数現況としては概ね横ばいである。

- BMB2008 プログラム（会報に同封）の発送作業の前に、生化学会との重複会員チェック作業を行った。その結果は以下のとおりであった。

[2008 年 10 月現在]

○正会員 10019 名における、生化学会との重複会員は 2255 名（22.5%）

○学生会員 5245 名における、重複会員は 129 名（2.5%）

- 本年 10 月、国際生物学オリンピック 2009 組織委員会（IBO2009 つくば）より本学会あてに、同オリンピック出題委員候補者の推薦依頼があった。理事長に相談し、専門・研究分野を考慮し、4 名の本学会会員を同組織委員会に推薦した。

- 生物科学学会連合より加盟学会あてに、大学附置研「共同利用・共同研究拠点」サポートレーター発行に関する、諾・否の問合せがあり、本案件は、生科連としての対応であるので、承諾の回答を行った旨報告された（本件に関する学会としての対応は審議事項の記録を参照）。

4) 中山建男世話人より、第 9 回（2009 年）春季シンポジウムの開催概要の報告がなされた。

- タイトル「分子生物学の新たな胎動」

- 会 期：2009 年 5 月 11 日(月)～12 日(火)

- 会 場：シーガイア ワールドコンベンションセンター・サミット（宮崎市）

2001 年開催当初の基本路線を継承し、日本発の最近の優れた分子生物学研究を幅広く集めたシンポジウムの企画を進めている。プログラム内容は、特別講演 1 演題（松尾壽之宮崎医大名誉教授）、シンポジウム約 16 演題を予定している。前日の 5 月 10 日には、宮崎市民プラザ・オルブライトホール（予定）にて市民公開講座を開催する。公開講座の講演は吉川 寛氏（阪大 / 奈良先端大名誉教授）と近藤滋氏（名古屋大・理）に依頼し承諾頂いた。今回の

市民公開講座は、主に高校生など若い人を対象に生物学の楽しさ、素晴らしさを知ってもらう公開セミナーとなるように企画を進めている。ポスター発表（一般演題）も70演題ほどを募集するので、若手研究者、大学院生の積極的参加を希望している旨説明がなされた。すでに、第9回春季シンポジウムの専用HPを開設しており（学会HPトップページからもリンク済み）新しい情報は随時そちらに掲載していくとの報告がなされた。

- 5) 長田重一第31回年会長より配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は5703題（うちLate-breaking abstracts投稿は130題）、事前参加登録は8039名となり、順調に準備が進んでいる（最終的に約11500名の参加者となった）。本年も、演題投稿画面および事前参加登録画面に、入力者の所属学会に関する項目を設定し、その集計結果資料が配布された。概要は以下のとおりである。

資料1. BMB2008 一般演題 発表希望分類別演題数と発表者の所属学会分布	
分子生物学会会員	3392 演題
生化学会会員	1801 演題
両学会会員	380 演題
総演題数	5573 演題
(Late-breaking abstracts 投稿を除く)	

資料2. 事前参加登録者の所属学会分布	
分子生物学会会員	4201 名（うち学生会員1943）
生化学会会員	2347 名（うち学生会員1088）
両学会会員	985 名（うち学生会員44）
非会員	506 名
合計	8039 名

長田第31回年会長より、海外からの特別講演者の出張日程を考慮し、ノーベル賞受賞式が重なる12月10日の週は、年会開催時期としては避けたほうがよいのではないかと意見が提出された。将来的な会場確保・調整に際し、事務局が留意することとなった。

出席理事より、配布資料1.「BMB2008 一般演題発表希望分類別（発表分野・大項目）演題数と分野ごとの発表者の所属学会分布」を、学会HPで公開してほしいとの依頼が出され、長田第31回年会長からも公開可、との確認がなされた。今回の第31回資料の標記データ掲載を公開の手始めとし、今後も原則として、分類別演題数データを蓄積していく、HPに掲載していくことが確認された（同資料は2008.12.18付にてHPに掲載済み）。

- 6) 小原雄治第32回年会長より、2009年の年会開催企画案につき報告がなされた。

- 会期：2009年12月9日(水)～12日(土)
- 会場：パシフィコ横浜
- 組織委員会：年 会 長 小原 雄治
副年会長 荒木 弘之
幹 事 小林 武彦、深川 竜郎
アドバイザー 桂 勲
組織委員 遺伝研を中心に静岡県の
会員 39 名

第32回年会の基本テーマを若い人達にどのように伝えていくか、そのキャッチコピーを最終検討中である。

準備状況と運営方針につき、以下のとおり詳細説明がなされた。

(1) “議論する場に”

- ①一日1000演題のポスターが一つの会場にまとまるという特性を活かし“議論する場”となる年会にする。
- ②ポスター会場での発表/討論を重視し充実させる。そのための工夫として、ディスカッサー配置による質疑・討論の時間を設ける等、様々な仕掛けを検討中である。

(2) “国際性を高める”

- ①シンポジウムは要旨・講演ともに英語で統一し、若手PIを中心に、各シンポジウムに外国人演者を2名程度招聘する（要旨集の印刷廃止費用の一部を、これに充当できるよう予算を検討中）。
- ②海外演者にもポスター討論など積極的な年会プログラムへの参加を依頼する予定。

(3) “社会性の推進”

(4) “ITを積極活用する”

- ①プログラム集は印刷物を作成・送付するが、要旨集はオンライン化し、印刷版を廃止する。（前回2008.9.27理事会で承認/決定済み）
- ②参加登録者はパスワード・IDを用いてWWW上での要旨等の前情報の閲覧・検索・ダウンロードを可能とする。
- ③年会会場にて、PC・携帯電話にて、検索・閲覧・その他のサービスを利用できるように、システム会社と打合せを進めている。

引き続き、小原年会長、荒木副年会長より、年会終了後の要旨のオンライン一般公開の方法（案）と時期（例、年会終了6カ月後など）について説明がなされ、活発な意見交換が行われた。討議の結果、年会終了後の要旨の一般公開については、本理事会はその基本方針を承認し、詳細は第32回年会組織委員会に一任されることとなった。

なお、一般演題募集を公告する際には（会報

2009年6月号)、要旨オンライン公開についての説明文掲載につき十分に留意することとした。演題投稿画面に、要旨オンライン公開に関する“確認「許諾」ボタン”(公開の可・不可)を設置するなど、その方法(アイデア)に関しての意見が提出された。

一般公開オンライン要旨のデータを、最終的にこのサーバにどのように設置するか、検索機能を含めたシステム上の検討課題も含めて、引き続き、第32回年会組織委員会にて検討してもらうこととなった。

- 7) 石野庶務幹事(谷口維紹第33回年会長代理)より第33回(2010年)年会につき報告がなされた。

- ・名称: 第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 合同大会
- ・略称: BMB2010 (Biochemistry and Molecular Biology 2010)
- ・会期: 2010年12月7日(火)~10日(金)の4日間
- ・会場: 神戸ポートアイランド
- ・年会長: 谷口維紹

第33回日本分子生物学会年会は、第83回日本生化学会大会(田中啓二会頭)との合同大会として開催される。開催地が神戸、開催会期は4日間であるので、今年のBMB2008の開催実績をふまえ、会場使用形式等を踏襲しつつ、魅力ある合同大会となるように、今後、学術企画を検討していきたい。

- 8) 上村匡編集幹事より学会機関誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

- ・出版契約について
『Genes to Cells』の出版元である Blackwell Publishing が John Wiley & Sons に吸収合併されたことに伴い、2年をかけて契約内容の抜本的な見直し、改定を進めてきたが、この11月にその最終版契約書が完成し、本日、理事会終了後に、岡田理事長、柳田充弘編集長に署名頂くこととなった。契約内容は本年1月にさかのぼって発効され、これにより機関誌発行に掛かる学会収支は大幅に改善される見込みである。
- ・柳田編集長より、投稿状況、インパクトファクター、国際ジャーナルの中での GTC 誌の位置づけ等について、説明がなされた。投稿数は持ち直してきており、今年はオンライン以降でもっとも多い投稿に近づいている状況にある。『Genes to Cells』をさらなる国際ジャーナルに育てるため、理事各位にご協力をお願いしたい。
- ・柳田編集長より、当初予定していた編集長の3年任期が終わろうとしているが、岡田理事長からの編集長継続の正式依頼を受けて、しかるべき時期まで

担当していく旨説明がなされた。しかし第16期の理事会の間に、次期編集長の人選や、新編集委員会(案)につき、しっかりと検討できる場(WG)を作ってほしいとの要望が出された。

出席者からの自由な意見交換が行われた後、岡田理事長より「Genes to Cells 将来計画ワーキンググループ」設置の提案がなされ、承認された。今後の GTC 誌の方向性、次期編集長の人選、新編集委員会(案)などについて、同 WG にてその詳細を検討していくこととなった。同 WG の構成メンバーは、後日、岡田理事長と上村編集幹事で検討し、柳田編集長と協議の上、決定していくこととなった。

- 9) 杉本亜砂子男女共同参画委員長より、第16期の委員会構成につき説明が行われた。調整可能であればあまり委員が固定化しないことが望ましいとの岡田理事長のアドバイスを受け、約半数の委員交代となった。16期の同委員会では副委員長を設置し、篠原理事に副委員長に就任してもらった。年会会期中に、15期16期合同の男女共同参画委員会会合を開催し、引継ぎと第16期活動につき検討したいとの報告がなされた。

また会期中の12月10日、BMB2008男女共同参画WGを世話人として、ランチョンワークショップ「進化していく男女共同参画」が開催される予定であるので、役員諸氏においてもぜひ参加頂きたい。

- 10) 岡田理事長より、委員会構成を若干コンパクトにしつつも、第16期においても引き続き、研究倫理に関する重要な案件に対応するため、研究倫理委員会を継続設置したいとの方針が述べられた。委員長は柳田理事に再任してもらい、研究倫理委員としては、小原雄治会員、田中啓二会員に就任を依頼し承諾を得たことの報告がなされた。

- 11) 柳田研究倫理委員長ならびに片山勉理事(釣本敏樹論文調査WG委員長代理)より、「論文調査ワーキンググループ報告書」「意見書(杉野元教授)」を学会ホームページと会報91号(2008年11月号)に掲載した旨報告がなされた。上記資料を公開後、調査WG各委員と学会事務局あてには、マスコミ関係者社(新聞社)と会員若干名からの問合せがあったが特には大きな混乱はなかった。

現在、論文調査ワーキンググループでは、報告書の英語版作成作業に着手しており、来年3月頃には、Genes to Cells に“Letter to Editor”といった形で報告書を掲載できる予定である旨、片山理事より説明がなされた。

- 12) 加藤茂明理事(中山敬一若手教育問題WG座長代理)より、年会初日(2008年12月9日(火)18:00

～19:30)に開催される第2回若手教育シンポジウム「今こそそう科学者の良心2008—みんなで考える科学的不正問題—」につき、概要報告がなされた。今年は、第一部：講演（釣本委員長による論文調査WG報告）、第二部：若手パネルディスカッション、第三部：中堅～シニアパネルディスカッションといった企画となっている。役員各位においてもぜひ参加してほしいとの説明がなされた。

- 13) 石野庶務幹事より、第31回通常総会資料についての説明がなされ、総会当日の議事進行ならびに報告担当者の確認がなされた。

2. 審議事項

1) 第16期副理事長の選任

石野庶務幹事より副理事長選出に関する細則の説明がなされ、自由討論が行われた。出席理事による投票が行われ（開票立会い：吉川監事）、第16期副理事長として、鍋島陽一氏と町田泰則氏が選任された。

2) 2008年度（平成20年度）収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事より2008年度（平成20年度）会計の収支について説明がなされた。昨年6月の法人移行により会計年度が4月～3月から10月～9月に変更となり、今回の2008年度決算が初めての12カ月の法人決算となった。本決算のもっとも大きなポイントは、年会会計（昨年のBMB2007決算の分子生物学会負担分の収支繰入）が学会本体会計にすべて繰り入れられた点であり、その年会会計の収支繰入内容について詳細説明がなされた。

本年度は会費納入率はかなり改善し、ほぼ従来のレベルに戻った。春季シンポジウムについては、収入48万円に対し支出566万円で518万円の持ち出しではあるが、従来も年会で剰余金を出して会計全体の中で春季シンポジウム費用を捻出しているもので、想定内の収支状況である。

Genes to Cellsについては、出版社との契約改定が進み、今年度会計内ですでに編集経費（発行支援金）のうち500万円の出版社の経費負担精算がなされた。その他、管理費の各科目について説明がなされた。論文調査WGの旅費・会議費や、論文調査報告書とGTC出版契約書に関する弁護士費用（相談と書類確認）は予備費より支出された。

2008年度決算の収支各科目の説明がなされた後、第15期鍋島監事（第16期理事）より、11月4日に金融機関の残高証明書等を一式確認し、20年度決算を認めた旨報告がなされた（本決算は10月24日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受けた。さらに11月13日、第15期大石監事の監査を終了している）。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第31回通常総会に諮られることとなった。

なお、本収支の税務処理であるが、本学会は会計事務所と顧問契約（税務顧問を含む）を交わしているので、税務専門家の指示のもと、11月25日に収益事業部分の法人確定申告を行った旨報告された。

3) 2009年度（平成21年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より2009年度（平成21年度）の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は理事会で承認され、第31回通常総会に諮られることとなった。

4) 第10回（2010年）春季シンポジウムについて

岡田理事長より検討資料（過去の開催地リスト）が配布され、同シンポジウム開催企画の経緯等につき説明がなされた。引き続き、2010年春季シンポジウムは仙台を開催候補地として世話人を調整中であるとの報告がなされ、その世話人の最終確認については、理事長に一任された（後日、第10回春季シンポジウム世話人を東北大学大隅典子教授に依頼することが決定し第31回通常総会において報告された）。

小川監事より、会員の少ない地域こそぜひ春季シンポジウム開催候補地として大事にしてほしい。との意見が出された。

5) 第34回（2011年）年会について

第34回年会については、年会長を学習院大学理学部 花岡文雄氏に依頼することが諮られ、承認された。

開催地は、東西（横浜・神戸）交互の基本ルールに基づき、すでに1年前に、事務局にてパシフィコ横浜を押さえている旨説明がなされた（会期：2011年12月13日～16日となる）。

6) 第35回（2012年）年会について

年会開催地決定のルールとしては、東西（横浜・神戸）交互の開催を基本にし、6～7年に1度、福岡を入れるといったことで、従来、決定されてきた旨、岡田理事長より説明がなされた。過去に2年ずつ同じ会場を使用した時期もあるが、2年連続使用による会場費減額制度は現在は運用されていないことが、事務局より報告された。

従来の決定方法を踏まえ、さらに最後の福岡開催が2005年（第28回年会）であることを考慮すると、2012年はそろそろ福岡開催を考えてもよい時期にあたる。使用する会場の規模、押さえるべき施設の予約状況もあり、現時点であれば、2012年の福岡会場（マリンメッセ福岡、福岡国際会議場、福

岡サンパレス、福岡国際センターの4施設)を確保可能である(注:2013年はすでに先約が入っており、福岡会場の確保は不可能である)。

審議の結果、第35回(2012年)年会については、開催地を福岡にすることを決定し、年会長については来年の定例理事会までに調整することとなった。

なお、現在の神戸開催、横浜開催と同様に、年会開催地(使用会場)が年会長選出(年会長の所属)に関して、何ら制約を生じさせないことの確認がなされた。

- 7) 学会創立30周年記念出版および第16期事業の検討
第15期理事会からの標記申し送り事項(東京化学同人から提示されている企画案)につき、その経緯の再確認が行われた。活発な議論が行われ、記念出版を企画するのであれば過去のまとめといったよりも将来に向けての企画出版ものが良い。大学生向け、小学生~中学生までを対象にしたもの(生物学の面白さ!)等々、種々の意見が提出された。

審議の結果、学術事業企画委員会を設置し、同委員会にて幅広く検討してもらうこととなった。同委員長には永田恭介理事が選出され、永田理事が近日中に委員会構成案を作成し、岡田理事長と調整しながら、その任を進めることとなった。

- 8) 大学附置研「共同利用・共同研究拠点」要望書に係る、対応の件

石野庶務幹事より、標記に関する経緯と、すでに本学会あてに相当数の施設より要望書(サポートレター)の提出依頼が届いていることの報告がなされた。引き続き11月25日付にて全理事あてに配信した、本学会の対応方法(案)の持ち回り(メール)審議結果の報告がなされた。

自由討論に入り、出席者より種々の意見が提出され、審議の結果、本理事会としては以下の基本方針を決定し、その審査業務については執行部(岡田理事長、鍋島副理事長、町田副理事長、石野庶務幹事)がその任にあたる事が決定された。

- 大学附置研「共同利用・共同研究拠点」要望書の提出依頼に係る、本学会の対応について(詳細手順は後日決定)

【審査の方針】

本学会と関連のある研究分野の施設からの協力依頼に対して、基本的にサポートしていくスタンスを取る。

【審査方法】

◎提出書類

研究所からは、以下2点の書類(原則として電子ファイル。郵送で届いた場合は電子データ再提出を依頼)を提出してもらう。

①研究所の方向性と実績が書かれた依頼書

(全国共同利用・共同研究拠点として、今後この分野においてどのような活動・貢献を果たされていくのか、また、研究所と分子生物学分野との関わりを明確に記載頂く。)

※外部評価をされていて、その報告書の提出が可能な場合は、参考資料として提出頂く。→印刷物(郵送)のみでも可。

②日本分子生物学会からの提出を希望する要望書の原案(文案)

(文書の宛名は、当該研究所所長あて。学会からの発信名は理事長名。)

※上記資料2点については書式等を含め柔軟に対応することとする。

9) 学会のあり方(学会の将来像)について

岡田理事長より、篠原理事から提出された検討依頼の案件((1)学会のあり方を議論する場を設置してほしい(2)国際会議・国際ワークショップへのサポートの検討)の報告がなされた。引き続き、篠原理事より詳細な説明があり、その後、自由討論に入った。基礎科学の現状認識とそれに対する学会の役割(何が出来るか!)、国際対応、社会との関わり、学会のあり方、男女共同参画の推進(女性理事が少ない/女性理事枠の検討等も含む)、理事選挙投票率があまりに低い問題、等々、種々の意見が提出された。

討議の結果、学会の将来像についてきちんと議論すべき時期に来ている。との認識の確認がなされ、第16期理事会において将来計画検討委員会を設置し、同委員会にて詳細検討を行うこととなった。委員長の委嘱と委員会構成については、岡田理事長に一任された。

上記、第16期第2回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2008年12月8日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第16期第2回理事会

議長	岡田清孝	㊞
議事録署名人	篠原彰	㊞
議事録署名人	田畑哲之	㊞

特定非営利活動法人日本分子生物学会 平成21年度(第31回)通常総会記録

日 時：平成20年12月10日(水) 16:45～17:30

場 所：神戸国際展示場 2号館3階 3A会議室
(第26会場)

社員数(正会員+名誉会員)：10020名

出席者数：5249名(本人出席66名、表決委任者5183名)

議事内容：

- 岡田清孝理事長より開会の挨拶がなされた。
- 定款第25条に基づき、岡田理事長より本総会議長として正井久雄会員が指名された。さらに定款第29条に基づき、議事録署名人として、小安重夫理事、白髭克彦理事が選任された。
- 正井議長より、定款第26条(総会の定足数)に基づき、上記表決委任者(委任状)を含めて出席5249名となり、本総会は成立する旨報告された。
- 経過報告(事業報告)

1) 理事長報告

岡田理事長より第16期理事会の組織概要(理事、幹事、各種委員会)の報告がなされた。一昨日に開催された定例理事会にて、副理事長として、鍋島陽一理事、町田泰則理事が選任された。第16期理事会では、新しい委員会ならびにワーキンググループ(・Genes to Cells 将来計画WG・学術事業企画委員会・将来計画検討委員会)を立ち上げ、様々な案件に対応していきたいとの説明がなされた。また、第15期理事会から継続して、今期も研究倫理委員会を継続設置し、研究倫理に関する諸問題に対応していきたいとの報告がなされた。

12月8日開催の理事会において、第34回(2011年)年会については、学習院大学理学部・花岡文雄氏に年会長をお願いすることが決定した。第10回(2010年)春季シンポジウムについては、東北大学・大隅典子氏に世話人をお願いすることとなった旨、報告がなされた。

2) 編集『Genes to Cells』報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』の編集状況など以下3点につき報告がなされた。

・出版契約について

『Genes to Cells』の出版元である Blackwell Publishing が John Wiley & Sons に吸収合併されたことに伴い、2年をかけて契約内容の抜本的な見直し、改定を進めてきたが、この11月にその最終版契約書が完成し、12月8日、岡田理事長、柳田充弘編集長が調印したとの報告

がなされた。これにより機関誌発行に掛かる学会収支は大幅に改善される見込みである。

・Genes to Cells 将来計画ワーキンググループの設置

12月8日開催の理事会にて、今後の GTC 誌の方向性、次期編集委員会(案)などに関して、詳細な検討を行うためのワーキンググループを設置していくことが決定された。

・今年はオンライン以降で、もっとも多い投稿数に近づいている状況にある。『Genes to Cells』をさらなる国際ジャーナルに育てるため、会員各位には積極的な投稿をお願いしたい。

3) 庶務報告

石野史敏庶務幹事より以下3点につき報告が行われた。

・会員現況：[2008年12月3日現在、名誉会員1名、正会員10019名、学生会員5245名、賛助会員35団体、総計15300]

・本年10月、国際生物学オリンピック2009組織委員会(IBO2009つくば)より本学会あてに同オリンピック出題委員候補者の推薦依頼があり、学会として、専門・研究分野を考慮し、4名の本学会会員を推薦した。

・大学附置研「共同利用・共同研究拠点」要望書に係る、本学会の対応

標記に関する経緯(本学会あてに相当数の施設より要望書の提出依頼が届いている)と理事会における検討結果(対応方法)につき詳細報告が行われた。本学会(理事会)としては次の基本方針を決定し、その審査業務については執行部(岡田理事長、鍋島副理事長、町田副理事長、石野庶務幹事)がその任にあたることとなった。

○大学附置研「共同利用・共同研究拠点」要望書の提出依頼に係る、本学会の対応について

【審査の方針】

本学会と関連のある研究分野の施設からの協力依頼に対して、基本的にサポートしていくスタンスを取る。

【審査方法】

◎提出書類

研究所からは、以下2点の書類(原則として電子ファイル。郵送で届いた場合は電子データ再提出を依頼)を提出してもらう。

①研究所の方向性と実績が書かれた依頼書

(全国共同利用・共同研究拠点として、今後この分

野においてどのような活動・貢献を果たされていくのか、また、研究所と分子生物学分野との関わりを明確に記載頂く。）

②日本分子生物学会からの提出を希望する要望書の原案（文案）

（文書の宛名は、当該研究所所長あて、学会からの発信名は理事長名。）

4) 第9回（2009年）春季シンポジウムについて

中山建男世話人（宮崎大学）より、標記シンポジウム「分子生物学の新たな胎動」を2009年5月11日（月）～12日（火）、宮崎市（シーガイアワールドコンベンションセンター・サミット）にて開催予定であることが報告された。前日の10日（日）には市民公開講座を開催する予定である。

5. 議 事

1) 平成20年度（2008年度）収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事より20年度決算の収支内容につき詳細報告が行われた。本決算については、本年10月24日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受けた（独立監査人の監査報告書を参照）。その後、11月4日に鍋島陽一第15期監事の監査を受け、11月13日に大石道夫第15期監事の監査を終了したことが報告された。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 平成21年度（2009年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より21年度の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は異議なく承認された。

3) 第16期監事選任の件

定款第14条に基づき、岡田理事長より第16期監事として小川智子会員、吉川寛会員が推薦され、承認（選任確認）された。

6. 小原雄治第32回年会長より、2009年の年会開催企画案につき報告がなされた。

・会期：2009年12月9日（水）～12日（土）

・会場：パシフィコ横浜

・組織委員会：年 会 長 小原 雄治

副年会長 荒木 弘之

幹 事 小林 武彦、深川 竜郎

アドバイザー 桂 勲

組織委員 遺伝研を中心に静岡県
の会員39名

ポスター会場での発表／討論を重視し充実させた。そのための工夫として、ディスカッサー配置による質疑・討論の時間を設ける等、様々な仕掛けを検討中である。また、ITを積極活用し、要旨集をオンライン化し、参加登録者はパスワード・IDを用いてWWW上で要旨等の前情報の閲覧・検索・ダウンロードが可能となるように、準備をすすめている旨説明がなされた。

7. 石野庶務幹事（谷口維紹第33回年会長代理）より第33回（2010年）年会につき報告がなされた。

・名 称：第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 合同大会

・略 称：BMB2010（Biochemistry and Molecular Biology 2010）

・会 期：2010年12月7日（火）～10日（金）の4日間

・会 場：神戸ポートアイランド

第33回日本分子生物学会年会は、第83回日本生化学会大会（田中啓二会頭）との合同大会として開催される。

8. 議長より閉会の挨拶があり、第31回総会が終了した。

上記、平成21年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成20年12月10日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
平成21年度通常総会

議 長 岡 田 清 孝 ㊞

議事録署名人 小 安 重 夫 ㊞

議事録署名人 白 髭 克 彦 ㊞

平成 20 年度（2008 年度）収支決算報告

平成 20 年度（2008 年度）収支決算報告書

平成 19 年 10 月 1 日から平成 20 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	予算額	決算額	備 考
I 収入の部			
1 入会金収入	500,000	1,857,000	
正会員	200,000	535,000	
学生会員	300,000	1,322,000	
2 会費収入	72,360,000	72,026,500	
正会員（海外在住含む）	56,280,000	59,503,500	
学生会員（海外在住含む）	14,400,000	10,733,000	
賛助会員	1,680,000	1,790,000	
3 事業収入	234,800,000	232,114,520	
①分子生物学・学術研究事業	232,800,000	229,877,810	
年会	226,200,000	229,393,686	BMB2007 収支より繰り入れ（分子生物学会の案分比率は 6 割）
春季シンポジウム	6,600,000	484,124	第 8 回春季シンポジウム（収入は懇親会参加費等）参加者 616
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	2,000,000	2,236,710	
国際誌編集協力金	2,000,000	2,236,710	
③その他の事業	0	0	
その他の事業	0	0	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	1,510,000	三菱化学より 130 万円（奨励賞副賞、選考経費）、その他
5 雑収入・預金利息	60,000	208,015	利息収入、複写使用料分配金
当期収入合計（A）	309,020,000	307,716,035	
前期繰越収支差額	85,470,000	85,469,154	
収入合計（B）	394,490,000	393,185,189	
II 支出の部			
1 事業費	261,000,000	240,721,775	
①分子生物学・学術研究事業	236,800,000	228,807,970	〈学術集会の開催等〉
年会	226,200,000	218,141,986	BMB2007 収支より繰り入れ（分子生物学会の案分比率は 6 割）
〃	—	5,000,000	第 30 回年会への定額補助金支出
春季シンポジウム	10,600,000	5,665,984	第 8 回春季シンポジウム（札幌）
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	20,400,000	8,050,516	
会報刊行費	4,000,000	2,968,560	会報 88、89、90 号
国際誌発行支援金	10,000,000	3,527,956	※契約改定により本会計内では 500 万円まで出版社が精算負担
国際誌オンライン費用	4,400,000	0	前年のオンライン不具合により、2008 は支払い無し
ホームページ関係費	2,000,000	1,554,000	10 万円×12 カ月＋メール配信
③その他の事業	3,800,000	3,863,289	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,018,900	↓男女共同参画「女子中高生夏の学校」講師旅費
事業費その他	2,000,000	2,251,139	若手教育 WG 費用、30 周年記念座談会開催費、生科連会費、
役員選挙	500,000	593,250	電子投票システム開発費
2 管理費	44,100,000	44,223,882	（1～3 月は派遣社員にて業務補充）
事務所賃料	2,600,000	2,683,068	賃料・共益費、光熱費、更新手数料含む ↑
給与手当	18,000,000	20,049,198	事務局（3 名） 2008.1 月 1 名退職で 4 月 1 名入職
法定福利費	2,000,000	2,233,418	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	100,000	24,387	職員健康診断
業務委託費	900,000	966,000	公認会計士監査料、会計事務所顧問料
会員管理システム運用管理費	2,400,000	2,142,000	会員管理サーバの運用・保守
印刷費	1,500,000	1,117,910	総会資料、総会委任状ハガキ、会費請求書の出力等含む
通信運搬費	12,500,000	8,804,592	
旅費交通費	2,000,000	1,881,930	15 期 16 期合同理事会他
会議費	300,000	475,555	理事会他
支払手数料	200,000	1,224,781	2008.4 職員採用時の人材会社コンサルティング費用支払い含む
消耗品費	800,000	814,220	封筒印刷代含む
雑費	800,000	1,360,660	海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、その他
減価償却費	—	446,163	電話機、コピー FAX 複合機
3 租税公課	2,000,000	0	
4 特定預金支出	1,000,000	1,492,000	退職給付引当金繰入（規程に準拠）
5 予備費	2,000,000	1,251,250	論文調査 WG 費用、弁護士支払い 48 万円（論文調査、出版契約）
当期支出合計（C）	310,100,000	287,688,907	
当期収支差額（A）-（C）	-1,080,000	20,027,128	
次期繰越収支差額（B）-（C）	84,390,000	105,496,282	

（単位：円）

平成 20 年度（2008 年度）貸借対照表

平成 20 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	108,704,313		
前払費用	296,756		
流動資産合計		109,001,069	
2 固定資産			
工具器具備品	380,472		
差入保証金	614,180		
固定資産合計		994,652	
資産合計			109,995,721
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	1,015,289		
前受会費	455,500		
前受金	1,300,000		
預り金	236,650		
流動負債合計		3,007,439	
2 固定負債			
退職給付引当金	1,492,000		
固定負債合計		1,492,000	
負債合計			4,499,439
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		85,469,154	
当期正味財産増加額		20,027,128	
正味財産合計			105,496,282
負債及び正味財産合計			109,995,721

(単位：円)

平成 20 年度（2008 年度）財産目録

平成 20 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科	目	金	額
I	資産の部		
1	流動資産		
	現金預金		
	現金	327,740	
	郵便振替 00170-5-592854	15,558,616	
	郵便振替 00100-2-465016	114,000	
	普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	2,089,854	
	普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 所沢支店	135,097	
	普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	169,120	
	普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	29,474,989	
	普通預金 中央三井信託銀行 本店営業部	6,741,823	
	定期預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	10,050,587	
	定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,010,718	
	定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	10,000,000	
	定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	5,000,000	
	定期預金 中央三井信託銀行 本店営業部	10,000,000	
	定期預金 住友信託銀行 東京営業部	9,031,769	
	前払費用 事務所家賃 10 月分	195,000	
	前払費用 編集室家賃 10 月分	60,000	
	前払費用 事務所火災保険 H20.10-H22.8 月分	23,960	
	前払費用 編集室火災保険 H20.10-H21.7 月分	9,946	
	前払費用 11/4 若手教育 WG 会場費	7,850	
	流動資産合計	109,001,069	
2	固定資産		
	工具器具備品 電話取付一式	281,932	
	工具器具備品 複合機	98,540	
	差入保証金 事務所	564,180	
	差入保証金 編集室	50,000	
	固定資産合計	994,652	
	資産合計		109,995,721
II	負債の部		
1	流動負債		
	未払金 ホームページ更新費用 9 月分	105,000	
	未払金 GTC 誌編集業務費 9 月分	300,000	
	未払金 GTC 編集室 9 月分アルバイト代	60,000	
	未払金 会員サーバ運用保守 9 月分	178,500	
	未払金 社会保険料	274,238	
	未払金 通信運搬費 9 月分	28,958	
	(外部倉庫、宅急便代、NTT、メールサーバ)		
	未払金 消耗品 (封筒印刷代)	22,522	
	未払金 印刷費 (コピー・FAX 代 9 月分)	12,324	
	未払金 クレジットカード決済処理手数料 (GMO)	33,747	
	前受会費 平成 21 年度以降会費	455,500	
	前受金 三菱化学奨励賞副賞、選考経費	1,300,000	
	預り金 源泉所得税	236,650	
	流動負債合計	3,007,439	
2	固定負債		
	退職給付引当金	1,492,000	
	固定負債合計	1,492,000	
	負債合計		4,499,439
III	正味財産の部		
	前期繰越正味財産	85,469,154	
	当期正味財産増加額	20,027,128	
	正味財産合計		105,496,282
	負債及び正味財産合計		109,995,721

(単位：円)

平成 20 年度（2008 年度）個別注記表

平成 19 年 10 月 1 日から平成 20 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
定率法によっております。
2. 固定資産の減価償却累計額
575,375 円
3. 退職給付引当金の計上基準
職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、当年度末において発生していると認められる額を計上しております。
4. 担保に共している資産はありません。
5. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 20 年度（2008 年度）決算に関して、平成 20 年 10 月 24 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 20 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 4 日に鍋島陽一第 15 期監事による監査を実施、同年 11 月 13 日、大石道夫第 15 期監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

理事長 岡 田 清 孝

理事（会計幹事）塩 見 春 彦

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第15期理事長 長田 重一 殿
第16期理事長 岡田 清孝 殿

平成20年11月4日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第15期監事

鈴木 陽一

平成20年11月13日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第15期監事

大石 正夫

私たちは、日本分子生物学会の平成20年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

平成20年10月24日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第15期理事長 長田 重一 殿
第16期理事長 岡田 清孝 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士

宮城 秀敏

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の 平成19年10月1日から平成20年9月30日までの平成20年度の計算書類、すなわち、収支決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類の作成責任は理事者にあり、私の責任は独立の立場から計算書類に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成20年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

平成 21 年度（2009 年度）収支予算

平成 21 年度（2009 年度）収支予算 平成 20 年 10 月 1 日から平成 21 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	21 年度予算	備 考
I 収入の部		
1 入会金収入	700,000	
正会員	200,000	1,000 円× 200 名
学生会員	500,000	1,000 円× 500 名
2 会費収入	71,390,000	
正会員（海外在住含む）	58,500,000	6,500 円× 10,000 名×約 90%
学生会員（海外在住含む）	11,250,000	3,000 円× 5,000 名×約 75%
賛助会員	1,640,000	40,000 円× 41 口（37 社）
3 事業収入	213,480,000	
①分子生物学・学術研究事業	206,480,000	〈学術集会の開催等〉
年会	205,980,000	第 31 回年会（BMB2008）案分繰入れ（343,300,000 円× 60%）
春季シンポジウム	500,000	市民公開講座含む
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	7,000,000	
Genes to Cells 出版収入	7,000,000	ワイリーブラックウェル社より
③その他の事業	0	
その他の事業	0	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	三菱化学より、奨励賞副賞および選考経費として
5 雑収入	150,000	利息収入、複写使用料分配金等
当期収入合計（A）	287,020,000	
前期繰越収支差額	105,490,000	※ 20 年度決算の繰越金概算とした。
収入合計（B）	392,510,000	
II 支出の部		
1 事業費	233,180,000	
①分子生物学・学術研究事業	216,480,000	〈学術集会の開催等〉
年会	205,980,000	第 31 回年会（BMB2008）案分繰入れ（343,300,000 円× 60%）
〃	5,000,000	定額補助金支出
春季シンポジウム	5,500,000	
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	12,400,000	
会報刊行費	4,000,000	
Genes to Cells 編集費	2,000,000	学会負担分（編集費用 1000 万円のうち 800 万円は出版社負担精算へ）
Genes to Cells オンライン費用	4,400,000	ワイリーブラックウェル社へ支払い（フリーアクセス料 100 万円を含む）
ホームページ関係費	2,000,000	10 万円× 12 カ月、メール配信と予備費 80 万円
③その他の事業	4,300,000	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	
事業費その他	3,000,000	
役員選挙	0	
2 管理費	45,800,000	
事務所賃料	2,800,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	20,000,000	事務局人件費
法定福利費	2,400,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	100,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	外部会計事務所、監査料、法人税務業務
会員管理システム運用管理費	2,200,000	サーバー運用保守等
印刷費	1,500,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	10,000,000	会報、会費請求、年会プログラム
旅費交通費	2,000,000	理事会他
会議費	500,000	理事会他
支払手数料	250,000	
消耗品費	850,000	封筒代含む
雑費	1,300,000	
減価償却費	400,000	電話機、コピー FAX 複合機
3 租税公課	3,000,000	法人税等支払い
4 特定預金支出	1,000,000	退職給付引当金
5 予備費	2,000,000	
当期支出合計（C）	284,980,000	
当期収支差額（A）-（C）	2,040,000	
次期繰越収支差額（B）-（C）	107,530,000	

（単位：円）

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、本学会賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合わせ、申請書類を各自お寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 田畑 哲之
〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-5
20 山京ビル 11 階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 町田 泰則
〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-5
20 山京ビル 11 階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第40回三菱財団自然科学研究助成	(財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内2-3-1	総額3億円、 40件程度	2009年 2月2日	1件当り 2,000万円まで	自然科学の基礎となる独創的、かつ先駆的研究とともに、すぐれた着想で新しい領域を開拓する萌芽ともなる研究（原則として個人研究）。
新化学発展協会2009年度研究奨励金	(社)新化学発展協会 ☎ (03) 5297-8820 〒101-0041 千代田区神田須田町1-12	8課題、 各課題1件	2009年 1月31日	1件 100万円	新化学の発展に資する若手研究者（39歳以下）の研究に対して、研究奨励金を交付。研究課題有り。
山田科学振興財団2009年度研究援助	(財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1	15件程度 (2件)	2009年 3月31日	1件当たり 100～500万円、 総額4,000万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 「推薦書は山田財団HPよりダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/ 」
第25回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1722 〒102-8471 千代田区一番町6 日本学術振興会内	1件 (1件)	2009年* 5月15日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。
第26回持田記念学術賞	(財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒160-0003 新宿区本塩町7-6 四谷ワイズビル	2件以内 (1件)	2009年* 7月31日	1件 500万円	生命科学・薬物科学・情報科学と医療応用の研究の分野における研究で、顕著な功績があり、かつ新進気鋭の研究者。
第27回研究助成		総額 8,000万円	2009年* 6月26日	1件 200万円 総額 1億6,000万円	
第26回国内および海外留学補助金		総額 1,000万円	2009年* 6月26日	1件 50万円	
平成22年度笹川科学研究助成	(財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒107-0052 港区赤坂1-2-2 日本財団ビル	約350件	募集期間 2009年* 10月1日 ～ 10月15日	1件当り100万円 まで	人文・社会科学および自然科学（医学を除く）の研究計画に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
上 原 賞	(財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2 件以内 (1 件)	2009 年 * 9 月 10 日	金牌、 2,000 万円	生命科学の栄養学、薬学、基礎 および臨床医学、社会医学、東 洋医学で顕著な業績を挙げ、引 き続き活躍中の研究者。
第 26 回井上學術賞	(財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	5 件以内 (2 件)	2009 年 * 9 月 20 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕 著な業績を挙げた者（ただし締 切日現在満 50 歳未満）。
第 2 回井上リサーチ アワード		3 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2009 年 * 4 月～9 月 公募予定	総額 1,000 万円	開拓的發展を目指す若手研究者 の独創性と自立を支援する目的 で、研究を助成。期間は 2 年。
第 18 回木原記念財団 學術賞	(財)木原記念横浜生命科学振興財団 ☎ (045) 825-3487 〒 244-0813 横浜市戸塚区舞岡町 641-12	1 件 (1 件)	2009 年 * 9 月 30 日	賞状、記念牌、 200 万円	最近において生命科学の分野で 優れた独創的研究を行っている 国内の研究者で、原則として締 切日現在 50 歳以下の者。
木原記念財団特別賞 (平成 20 年より新設)		1 件 (1 件)	2009 年 * 9 月 30 日	賞状、記念牌、 100 万円	生命科学の分野で独創的かつ社 会的貢献に繋がる研究を行って いる研究者で 50 歳以下の者。
平成 21 年度日産科学 賞	(財)日産科学振興財団 ☎ (03) 3543-5597 〒 104-0061 中央区銀座 6-16-9	1 件 (1 件)	2009 年 * 9 月 15 日	賞状、500 万円	自然科学分野で、学術文化の向 上・発展に大きな貢献をした、 わが国の公的研究機関に所属 する概ね 50 歳以下の研究者。年 度により、対象研究分野の指定 有り。
住友財団 2009 年度基 礎科学研究助成	(財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館	総額 1 億 4,000 万円 100 件程度	2009 年 * 6 月 30 日	1 件当り 500 万円 まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にま たがる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者（個人また はグループ）を対象とする。
第 50 回藤原賞	(財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2009 年 1 月 31 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
平成 22 年度科学技術 分野の文部科学大臣 表彰科学技術賞およ び若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞 140 件(年)のうち、 研究部門は 40 件程度 若手科学者賞 は 100 名程度 (学会推薦枠は 定まっていな いが推薦は若 干名まで)	2009 年 * 7 月 17 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄 与する可能性の高い独創的な研 究又は発明を行った個人又はグ ループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立 った研究等、高度な研究開発能 力を示す顕著な研究業績を挙げ た若手研究個人。
平成 21 年度島津賞	(財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1 件 (推薦枠は若干件)	2009 年 * 9 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 300 万円	科学技術、主として科学計測お よびその周辺の領域における基 礎的な研究において、近年著し い成果をあげた功労者を対象と する。
島津科学技術振興財 団研究開発助成		総額 1,000 万円	2009 年 * 9 月 30 日	1 件当り 100 万円以下	上記同様を研究対象とする、国 内の研究機関に所属する 45 歳 以下の新進気鋭の日本人研究者。
東レ科学技術賞	(財)東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2 件前後 (2 件)	2009 年 * 10 月 9 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	学術上の業績顕著な者、学術上 重要な発見をした者、重要な発 明により効果が大い者、技術 上の重要問題を解決し貢献が大 い者。
東レ科学技術研究助 成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2009 年 * 10 月 9 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の 進歩・発展に貢献するところが 大きいと考えられる、独創的、 萌芽的な研究を活発に行ってい る若手研究者（原則として 45 歳 以下）。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 41 回内藤記念科学振興賞	(財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3005 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8 階	1 件 (1 件)	2009 年 * 10 月 1 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与し得る自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 41 回海外学者招へい助成金		(前期・後期各 10 件)	2009 年 * 6 月 2 日・ 10 月 1 日	1 件 20 ～ 80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成		8 ～ 12 件		1 件 100 万円	ブレインサイエンス研究分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸見記念賞	(財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	1 件	2009 年 * 10 月 16 日	1 件 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 45 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件		1 件 30 万円まで	ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件	2010 年 * 1 月 15 日	1 件 30 万円まで	同分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘を助成。
平成 22 年度研究助成	(財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	10 数件	2009 年 * 11 月 30 日	1 件 250 万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。
ノバルティス研究奨励金	(財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約 45 件 指定機関からの 推薦必要	2009 年 * 9 月 11 日	1 件 100 万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 ☎ (03) 3263-1762 〒 102-8472 千代田区一番町 8 番地	20 件程度	2009 年 * 5 月 27 日、 28 日 (受付日)	賞状、賞碑、 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者 (45 歳未満)。
(財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2009 年 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 21 年度研究助成	(財)光化学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	総額 5,000 万円	2009 年 * 8 月 31 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2009 年度朝日賞	(財)朝日新聞文化財団 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4 ～ 6 件 (1 件)	2009 年 * 8 月 31 日	正賞 (ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。

件数の () 内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

* は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

2009 年度第 4 回「ロレアルーユネスコ女性科学者 日本奨励賞」募集のお知らせ

【助成内容】

世界規模で展開するロレアルーユネスコの女性科学者を支援する共同プロジェクトの理念を継承し、将来を担う日本の若手女性研究者が国内の教育・研究機関において研究を継続できるよう、奨励しています。生命科学、物質科学の分野からそれぞれ 1 年 2 件（2 名）、計 4 件（4 名）を選考し、賞状と奨学金 100 万円を贈呈します。

【対 象】

生命科学、物質科学の分野において、博士課程（後期課程）に在籍または、博士後期課程に進学予定の 40 歳未満の女性で、交付後 1 年間、国内で教育・研究に従事できる方。

【応募方法】

指導教員による推薦

応募要項は日本ロレアルウェブサイト (<http://www.nihon-loreal.co.jp>) からダウンロードできます。封筒に「ロ

レアルーユネスコ女性科学者 日本奨励賞」応募書類と必ず明記の上、必要書類を下記送付先にご郵送ください。

* e-mail での応募は受け付けておりません。

書類送付先：

「ロレアルーユネスコ女性科学者 日本奨励賞」事務局 宛
〒163-1071
東京都新宿区西新宿 3-7-1 新宿パークタワー
日本ロレアル株式会社
コーポレート・コミュニケーション本部

【締 切】 2009 年 2 月 28 日(土) (締切日の消印有効)

【発 表】 2009 年に東京で開催予定の授賞式にて発表

【お問い合わせ先】

「ロレアルーユネスコ女性科学者 日本奨励賞」事務局
e-mail : fwis-japanfellowships@jp.loreal.com

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○千里ライフサイエンスセミナー

「エピジェネティクス：ゲノムを管理し活用する戦略」

日 時：平成 21 年 4 月 17 日(金) 10：00～16：10

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル

5 階ライフホール

着眼点：

エピジェネティクスは真核生物が生み出したゲノムの高度活用戦略である。その仕組みには様々なクロマチンの修飾のほか、non-coding RNA が関与することが分かってきた。また、次世代シーケンサーをはじめとする最新技術の導入により、エピゲノム研究が一気に加速している。エピゲノムを知り、活用することは、幹細胞の作成・分化誘導・品質管理、がんの診断・治療、生活習慣病の解明に必須である。

コーディネーター：

国立遺伝学研究所人類遺伝研究部門 佐々木裕之
京都大学ウイルス研究所 眞貝 洋一

プログラム：

1. はじめに
国立遺伝学研究所人類遺伝研究部門
教授 佐々木裕之
2. small RNA とレトロエレメント抑制

JST さきがけ研究員・大阪大学生命機能研究科
宮川さとみ

3. 幹細胞のゲノム品質管理とリプログラミング

京都大学大学院医学研究科遺伝医学講座
教授 篠原 隆司

4. 大規模エピゲノム解析と疾患

東京大学先端科学技術研究センター
教授 油谷 浩幸

5. がん抑制遺伝子の DNA メチル化と RNAi

札幌医科大学大学生化学講座 教授 豊田 実

6. おわりに

京都大学ウイルス研究所 教授 眞貝 洋一

参加費：無料

定 員：300 名

申込方法：

氏名、勤務先、〒所在地、所属、電話および FAX 番号を明記の上、FAX または E-mail で下記宛にお申込み下さい。事務局より参加証を返送いたします。参加証はセミナー当日、受付で提示下さい。

申込先：

(助)千里ライフサイエンス振興財団 セミナー Z1 係
〒560-0082
大阪府豊中市新千里東町 1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル 20 階
TEL : 06-6873-2001 FAX : 06-6873-2002
E-mail : tnb@senri-life.or.jp

○第 12 回マリンバイオテクノロジー学会大会 開催のお知らせ

第 12 回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の
要領で開催いたします。

会 期：平成 21 年 5 月 30 日(土)～ 31 日(日)
会 場：早稲田大学大久保キャンパス 63 号館
大会役員：大会会長 逢坂 哲彌

早稲田大学理工学術院 教授
実行委員長 竹山春子

早稲田大学理工学術院 教授

大会事務局：〒 162-8480 東京都新宿区若松町 2-2
早稲田大学先端生命医科学センター
早稲田大学 理工学術院 先進理工学部 生命医科学科内
第 12 回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会
TEL : 03-5369-7326 FAX : 03-5369-7302
E-MAIL : assoc-marine@list.waseda.jp

大会の内容：

1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）
 2. シンポジウム（一般）
 3. 懇親会
- * シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウム
の企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

発表形式：

1. 口 頭 発 表：一般講演は質疑含み 15 分
液晶プロジェクター使用
2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの
表彰を予定

一般講演のセッション：

1. 微生物
2. 微細藻
3. 海藻・付着生物
4. 魚介類
5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラライゼーション
7. マリンゲノム
8. 環境・環境適応
9. その他

発表申込みの締め切り：3 月 13 日(金)必着

講演要旨の締め切り：3 月 31 日(火)必着

事前参加登録締め切り：4 月 30 日(金)必着

講演申し込み方法および参加登録方法の詳細は、大会
ホームページでご確認下さい。

第 12 回大会ホームページアドレス：

<http://www.waseda.jp/assoc-marine/>

学会ホームページ：

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsmb/index.html>

○日本ヒトプロテオーム機構 第 7 回大会 (7th JHUP0) 基礎研究からさまざまな応用研究へ飛躍する最先端 プロテオミクス～医学・薬学・農学への応用～

会 期：2009 年 7 月 27 日(月)～ 28 日(火)

(演題募集期間：2009 年 4 月 1 日(水)～ 4 月 30 日(木))

会 場：北里大学薬学部 白金キャンパス

主 催：日本ヒトプロテオーム機構 北里大学理学部／
北里大学薬学部

大会委員長：前田 忠計（北里大学理学部教授）

◆特別招待講演

統合的迅速臨床研究とヒトプロテオーム研究（仮題）

井村 裕夫（独立行政法人 科学技術振興機構 研究開
発戦略センター 首席フェロー、京都大学名
誉教授、元 総合科学技術会議 議員）

◆招待講演

1. Genomic and Proteomic View on the Lifespan
Extension in *C. elegans*

Young-Ki Paik

(Director, Yonsei Proteome Research Center,
Yonsei University, Seoul, Korea : 国際 HUPO 執行
部メンバー、国際 HUPO 理事、国際 HUPO2007
ソウル大会大会長)

2. タイトル未定

夏目 徹

(独立行政法人 産業技術総合研究所バイオメディシ
ナル情報研究センター 細胞システム制御解析チー
ム チームリーダー)

3. タイトル未定

Visith Thongboonkerd

(Head of Medical Proteomics Unit, Office for
Research and Development, Faculty of Medicine,
Siriraj Hospital, Mahidol University, Bangkok,
Thailand : 国際 HUPO 理事)

◆シンポジウムテーマ等詳細はホームページ
(http://www.bioweb.ne.jp/7th_jhupo) をご覧く
ださい。

◆連絡先◆

7th JHUP0 運営事務局（株式会社エー・イー企画内）

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-2-8

TEL : 03-3230-2744 FAX : 03-3230-2479

jhupo7@aeplan.co.jp

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2009年2月1日現在)

アサヒビール株式会社 健康おいしさ研究所
アジレント・テクノロジー株式会社
アトー株式会社 営業開発グループ
アプライドバイオシステムズジャパン株式会社
株式会社エー・イー企画
科学技術振興機構 研究基盤情報部バイオインフォマティクス課
科研製薬株式会社 研究開発本部総合研究所
協和発酵工業株式会社 バイオフィロンティア研究所
株式会社コクサン
コスモ・バイオ株式会社 開発部
産業技術総合研究所 北海道センター図書室
ジャスコインタナショナル株式会社 第二事業部営業課
住友化学株式会社 農業化学品研究所探索生物グループ
第一三共株式会社 創薬基盤研究所
タカラバイオ株式会社 バイオインダストリー部
武田バイオ開発センター株式会社 プロジェクトマネジメント部
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究推進部加島推進グループ
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 技術営業部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム事業部特機営業部
ヒゲタ醤油株式会社 研究開発部
日立公共システムエンジニアリング株式会社
富士レジオ株式会社 研究開発部門研究支援グループ
フナコシ株式会社
三菱化学株式会社 イノベーションセンター
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
和研薬株式会社 大阪センター営業推進部

〈50音順〉

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第92号 (2009年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——岡田 清孝